

# 十全同窓會會報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓會會報  
編集委員会  
印刷／ヨシダ印刷(株)

(題字…佐藤保十全同窓會會長)

## 新年のご挨拶

十全同窓會會長 佐藤 保



皆様、明けましておめでとうござい  
す。金沢大学医学部・創立百五十周年の  
年が幕を開けました。それにあわせたか  
のように、十全同窓會會報も今回で百五十  
号を数えます。創立と創刊はそれぞれ異  
なりまして、数字の一致は偶然でありま  
すが、それを偶然で済まされないので人  
の心であります。昨年暮れに学長、歴代  
の編集長、編集委員が集まって、百五十  
号記念座談会を開き、会報と大学の過去・  
現在・未来を語り合いましたのでお読み  
下さい。

悠久の流れに節目を区切って、時代ご  
とに居住まいを正すのが人の世の習いと  
すれば、去年三・一一に表象される東日本  
大震災は、戦後たどってきたわが国の歩  
みを一変させる衝撃を与えました。この衝  
撃はひとりわが国だけに止まらず、全世  
界に波及し、「ツナミ」、「フクシマ」とい  
う仮名文字が、そのままで世界に通ずる  
言葉となりました。このことは、過去にお  
ける「ヒロシマ」と同じ重要な出来事であ  
ることを意味しております。

昨年九月、「国民皆保健達成から五十年」  
の節目に「ランセット」誌が日本特集号を  
刊行しました。その序文で編集長リチャー  
ド・ホートン氏が、「この特集を組むにつ  
かけとなったのは父が残してくれた三枚の  
写真、原爆投下直後のヒロシマの写真で  
あった。一九四五年八月六日午前八時十五  
分は、人類の平和と和解の象徴として常  
に記憶にとどめておかなくてはならない。」  
と述べています。「国民皆保険制度がなぜ

日本で達成できたのか」を検証・特集し  
たその年に、「フクシマ」に表象される原  
発被害が世界を震撼させることになった  
訳です。運命のいたずらでは済まされな  
い、わが国の宿命を感じます。

野田内閣は震災からの復興に全力を尽  
くす決意を表明しておりますが、復興の  
財源を含め、わが国を取り巻く政治、経済、  
社会環境はまさに問題山積の状況であり  
ます。膨大な国家財政の赤字、民主党を  
取り巻く衆参両院の政治状況、憲法違反  
といわれた議員定数問題、この先新設が  
困難となった原発の再稼働と今後のエネ  
ルギー問題、このままでは早晚破綻する  
社会保障制度と医療保険制度、情報不足  
で先の見えないTPP加盟問題、ユーロ  
不安とアメリカの財政赤字による史上最  
高の円高不況、どれを取り上げても早急  
には解決できない問題ばかりであります。

最近、欧米では「日本化」という言葉  
がはやり、「政治が指導力を発揮せず、物  
事を先送りする」ことを皮肉っているよ  
うです。これまで積み上げてきたわが国  
の国際信用が危機に瀕しております。野  
田首相は所信表明演説の中で「東日本大  
震災と世界経済危機という二つの危機を  
克服すること併せ、将来への希望にあ  
ふれ、国民一人ひとりが誇りを持ち、こ  
の国に生まれてよかったと実感できるよ  
う、この国の未来へ向けた投資をすすめ  
ていかなければなりません」と述べてい  
ます。この言葉に誤りはありませんが、  
それは政治家だけでできることではあり  
ません。われわれ国民一人ひとりの決意  
でなければなりません。会員の皆様それ  
ぞれに、今年が良い年でありますよう祈っ  
ております。

## 目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 新年のご挨拶              | 1  |
| 創立百五十周年記念事業の進捗状況    | 2  |
| 平成二十三年度探検大型プロジェクト   | 3  |
| 受賞                  | 4  |
| 秋の叙勲                | 5  |
| 学会報告                | 6  |
| 論説                  | 7  |
| 彦三種痘所・金沢医学館跡地 石碑建立  | 8  |
| 十全学術行脚 第二十一回        | 9  |
| 教授退職記念講演会・記念式のお報せ   | 11 |
| 病院紹介                | 12 |
| 教室だより               | 14 |
| 支部だより               | 16 |
| クラス会                | 18 |
| 同窓生の消息              | 22 |
| 医学部百五十年史のための覚え書【33】 | 23 |
| 学生課外活動支援報告          | 24 |
| 十全昔話                | 27 |
| 学生コーナー              | 28 |
| 第五回ホームカミングデイ        | 29 |
| 銘板・石碑設置と薔薇の植樹       | 30 |
| 編集後記                | 30 |

# 創立百五十周年記念事業の進捗状況

井関 尚一

いよいよ創立百五十周年である二〇二二年（平成二十四年）を迎え、記念事業計画も詰めめの段階に入つてまいりました。昨年十二月初めの時点で、寄附金額は七千万円を越えました。この中には、十一月に会員のお一人から寄附いただいた二十万円が含まれます。これまでのご協力に対して心からお礼申し上げます。十二月十九日に開催した推進準備委員会において確認した事業内容をご報告いたします。

まず金沢大学医学部創立百五十周年記念誌については、引き続き、鋭意編集を進めています。当初の想定より内容が増えたこと、今年七月七日の記念式典と祝賀会の記録も含めることから、刊行は今秋になりそうです。豪華な装幀、多くの写真を含む上製本であり、原則として有料配布となります。大学は刊行物を販売できないため、十全同窓会に委託して販売していただく予定になっています。今回百五十周年記念誌の第一回目の事前購入申込書を同封いたしました。発行部数の目安とするためにも、早めにお申し込みいただければ幸いです。次に記念モノメン「若き医師たち」ですが、金沢美術工芸大学の石田陽介教授に依頼した塑像が春をめどに完成予定であり、その後、青銅による鑄造を行い、御影石の台座とともに完成させて、七月七日に除幕式を行います。昨年十月に関係者一同で石田先生のアトリエに見学に行きました折に、実物大の

塑像の原型となる三分の一サイズ塑像が完成しておりますので、写真を掲載いたします。モノメンの設置場所は、

医学類正面玄関前で、将来の正門から入って右手にある地所に決定しました。除幕式までにモノ



メント周囲数メートル四方のみを整地してインタローッキング舗装する工事を行います。これは将来の正門周辺整備事業に含まれる一部区域の先行整備ということになります。除幕式の時点ではまだ正門と構内道路が現在位置のままであるため、あまり見栄えのしない場所への設置となります。将来を見越してのことなので、どうぞご容赦ください。キンストレーキ修理記録のデジタルアーカイブ（DVD）については、すでに音声による解説を加えて編集し、完成いたしました。このDVDは学術目的で作成されたため非売品ですが、百五十周年記念誌を購入された方には洩れなく無償で配布する予定です。金沢医学館跡地の石碑については、大手町の市医師会館の敷地への設置が無事完了し、十一

月六日に除幕式を行いました。前日に行われた全学による彦三種痘所跡地の石碑の除幕式とともに、創立百五十周年記念事業のひとつのハイライトになりました。医師会館前の歩道からすぐ見える場所にありますので、ぜひご覧になってください。新たに加わった事業として、展示企画「金沢大学医学部百五十年の歩み」（仮称）があります。これは昨年秋に角間の金沢大学資料館で行われた特別展「金沢大事始め」の内容のほぼ三分の二が明治以来の医学部の歩みであったため、古畑徹資料館長のご好意により医学部関係の展示パネルをお借りし、宝町で展示するものです。五月の連休から十一月の医学展あたりまでの半年間を予定しています。七月七日（土）は、午前九時の医学部記念館での十全同窓会総会および十全医学会総会に続き、十全講堂で十時から記念式典および特別講演（免疫学者で京大教授の本庶佑氏と、建築家で東大栄誉教授の安藤忠雄氏による）を行い、その後記念モノメントの除幕式に続いて、午後一時頃から祝賀会を行うという日程が確定しました。祝賀会は、一九二六年（大正十五年）の旧制金沢医科大学開学記念祝賀会に倣い、梅雨時ではありますが、医学類中庭にテントを張って野外で行います。千人規模の立食とし、同窓会員を始めとして現役学生や教職員に広く参加していただく予定です。わずかな額の会費ですが原則として有料制とする予定です。参加人数把握の必要がありますので、今回同封しました第一回目の調査用返信葉書にて、記念式典（記念講演、モノメント除幕式を含む）ならびに祝賀会への出欠ご希望をお知らせくださると幸いです。

最後に、前回ご報告したように、キャンパス整備事業として、医学類正門周辺の整備を計画しています。現在の正門を十全講堂前のプロムナードを延長した場所に移動し、新たに門柱を建立し、周辺を緑地化します。プロムナード本体は残念ながら正門近辺しか整備できませんが、これらの事業だけで約八千万円の経費見積もりとなっています。ただし、平成二十五年度から金沢市による宝町キャンパス前の用水に沿った遊歩道建設の計画があり、上記整備事業費の一部を金沢市に負担してもらうことにより、整備範囲を広げられる可能性があります。今後、附属病院の正門周辺整備計画とも連動させて計画を立てていきます。

現在の募金計画は二〇一五年（平成二十七年）三月までの予定になっていますが、平成二十四年度末までに寄せられた募金額によりさしあたりの整備事業規模を決め、平成二十五年度には着工したいと存じます。それまでの募金目標額を、すでに着工した事業に四千万円、今後着工する正門周辺整備事業に八千万円の、計一億二千万円に設定させていただきます。万事ご多端の折でまことに恐縮ですが、いよいよ本年は創立百五十周年です。まだご寄附を頂いていない会員におかれましては、改めて記念事業達成のための募金の趣旨にご賛同くださり、よろしくご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。前号に同封しました振込用紙をご利用いただくか、医学部創立百五十周年記念事業のホームページ（[http://www.kin.kanazawa-u.ac.jp/kin\\_med150/](http://www.kin.kanazawa-u.ac.jp/kin_med150/)）を通じて医学類事務にお申し込みいただければ幸いです。



今年度採択大型プロジェクト

独立行政法人日本学術振興会  
最先端・次世代研究開発支援プログラム

覚醒制御システムのコネクトミクス

睡眠・覚醒制御系の全解明

分子神経科学・統合生理学分野 櫻井 武

睡眠は、記憶・学習に関与するほか、心身の健康を維持するために欠かせないきわめて重要な働きをしている。アルツハイマー病、うつ病、メタボリックシンドロームと睡眠不足との関連も注目されている。生活が多様化していく中、睡眠に問題を抱えるひとは五人に一人に上り、心身の健康や経済活動に大きく影響している。日本は文明国の中でも睡眠時間が短く、睡眠障害が日本経済にもたらす損失は年間三兆五千億円に上ると言われている。

そこで、現代人の睡眠の質を改善し、生活のある生活を実現するために、睡眠と覚醒を切り替える脳内メカニズムを解明し、健康な睡眠を促す方法や睡眠障害の治療法を開発するための知見を得ることを目的として研究を進めている。

私たちのグループは睡眠と覚醒をあやつる脳内物質「オレキシン」の同定とその機能の解明により、睡眠・覚醒の制御機構を明らかにしてきた。この過程で種々のノウハウや遺伝子改変マウスを開発し、独自の資源や技術を蓄積してきた。これらを有効に用いて研究を推進していききたい。オレキシン拮抗薬が既に「夢の睡眠薬」

グローバル化による生殖技術の市場化と生殖ツーリズム…倫理的・法的・社会的問題

環境生態医学・公衆衛生学 日比野 由利

として期待されているように、われわれの成果は睡眠を制御する方法の開発に結びつくほか、睡眠が記憶や心身に与える機構を明らかに出来ると考えている。

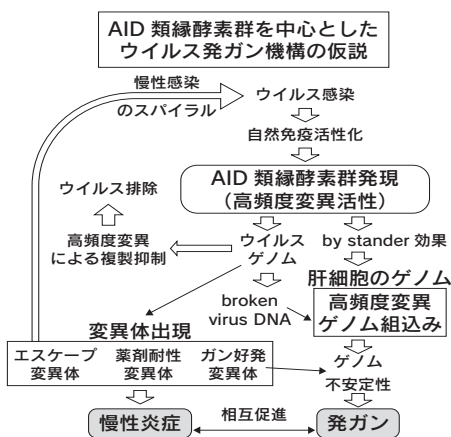
一九七八年に世界初の体外受精児が誕生して以来、体外受精及びそこから派生した技術は、急速に社会に浸透している。二〇〇七年の我が国における体外受精による出生は約五十五人に一人とされる。一方、我が国では、卵子提供や代理出産などの第三者が関わる生殖技術について法規制はなされておらず、日本産科婦人科学会などの専門職組織による自主規制に委ねられている。そうした中、近年、第三者が関わる生殖技術を利用するため、日本人がアジア地域へ渡航治療する現象が見受けられる。二〇〇八年、インドで日本人男性が代理出産を依頼し、子どもが無国籍になったトラブルが世界

遺伝子改変酵素群 AID/APOBEC がつくる B 型肝炎慢性化と発ガンの機序

分子遺伝学 村松 正道

発ガンウイルスがどのように発ガンを起こすかは不明な点が多い。特に肝炎ウイルス(HBV)やパピローマウイルス(HPV)においては感染者が日本に多いこともあり、それらによるウイルス発ガン機構の解明は我が国にとって、非常に重要な課題である。これまで我々は遺伝子改変酵素AIDを発見し、AIDが免疫系に重要である事を示してきた。予備

中で報道された。これは、日本人による生殖ツーリズムの氷山の一角であるといえる。新興国では規制が十分ではないため、技術利用に対して寛容な環境が形成されていることが多い。メデイカルツーリズム振興策などにより、規制格差や経済格差を、外貨獲得の好機として積極的に利用しようとする新興国も少なくない。この結果、規制が厳しい国から寛容な国へ、あるいは、労働力が安価な国へと、身体利用の流れが世界的な規模で生じている。こうしたグローバル化がもたらす生殖ツーリズムに関する問題を、倫理・法・社会・医療など様々な観点から、検討している。



## 文部科学省

## 脳科学研究戦略推進プログラム

## 神経内分泌仮説に基づく知能障害を有する

## 自閉症スペクトラム障害の診断と治療の展開研究

国立大学法人金沢大学(子どものこころの発達研究センター長)

東田 陽博

厚生労働省が増える国民病として精神疾患を加えて、「がん・脳卒中・心筋梗塞・糖尿病」と共に五大疾患とする方針を発表したことに呼応する形で文部科学省は「発達障害・うつ・認知症」の三つの分野の臨床研究を推進する事になった。三年前から脳科学研究戦略推進プログラ

ムがスタートしていたが、今年度は「精神神経疾患の克服を目指す脳科学研究(課題F)」で募集が六月にあった。東田陽博脳細胞遺伝子学研究分野教授の提案した「神経内分泌仮説に基づく知能障害を有する自閉症スペクトラム障害の診断と治療の展開研究」が採択された。

## 日本細菌学会理事長に就任

神谷 茂博士

(杏林大学医学部感染症学 昭和五十三年卒業)



この度、日本細菌学会第五十四代理事長を拝命することとなりました。日本医学会の分科会である日本

細菌学会のルーツは、昭和二年(一九二七年)に北里柴三郎先生(慶応大学医学部)が会長として開催された第一回衛生学微生物学寄生虫学聯合学会に求められ、昭和四年、本聯合学会より衛生学会、

寄生虫学会が分離・独立し、日本細菌学会と名称変更されました。毎年一回の総会が開催され、本年の三月には長崎にて第八十五回総会が開催されます。正会員二千二百七名、学生会員五百七十名(平成二十三年一月時点)を数え、細菌学領域の学会では我が国において最も歴史ある、かつ研究レベルの高い学会と言えます。従来の研究センターであった日本細菌学会での活動内容を、今後学会全体を鳥瞰しつつ、他学会との折衝を含めた幅の広い活動にシフトしていかねばならないと考えております。

小生、金沢大学医学部では故西田尚紀名誉教授、中村信一教授(現金沢大学長)に細菌学の手ほどきを受け、クロストリジウム研究を開始いたしました。その後

他には三邊教授、棟居教授、菊知准教授の精神・子どものこころの発達研究センター教員、脳細胞遺伝子学の横山准教授、運動生体管理学の藤原教授やF S Oの堀家助教などが分担研究者として参加する。

研究の内容は①オキシトシンの自閉症治療の臨床研究、②脳機能計測(脳磁計)による自閉症の客観診断法の確立、③オキシトシンの中枢作用の解明、である。③の研究に関連して、分担研究機関として東北大学を加え、農学研究科の西森教授と共同研究する。

また、本研究は浜松医科大学、福井大学、大阪大学の研究チームとも共同で行う。加えて、福井大学精神科、東京大学精神科とも協力し、オキシトシンを早期に治療に使えるようにする事が期待されている。

東海大学を経て杏林大学に移り、現在クロストリジウム・デیفイシルの病原性、ヘリコバクター・ピロリの病態形成機構、マイコプラズマ・ニューモニエの実験動物感染、腸内および胃内正常細菌叢の生体への作用などに関する研究を専門としております。

所属大学での教育や研究のみならず、今後は日本細菌学会理事長として本学会の活性化ならびに若手研究者の研究奨励を大きな目標として努力する所存です。近年、学際的な研究が強く要請されておりますので、十全同窓会会員の先生方におかれましては、日本細菌学会に関する諸事につきましてご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

## 受賞

## 第二十六回日本糖尿病合併症学会 Young Investigator Awardを受賞

太田 嗣人博士(平成九年卒業)

平成二十三年十月十四日に大宮で行われた第二十六回日本糖尿病合併症学会にて「Young Investigator Awardを受賞」。「糖尿病における肝脂質代謝異常とその制御に関する研究」と題し受賞講演を行いました。長年の高血糖とインスリン作用不足によって起こる慢性合併症は、全身の血管とあらゆる臓器に起こり、糖尿病患者のQOLと生命予後を悪化させます。世界の糖尿病患者が三億人を超える現在、合併症の発症予防と進展阻止への対策は糖尿病臨床の重要な課題であります。

私は博士課程から、インスリン抵抗性の発症と維持における肝臓の重要性を解明する研究を行ってきました。2型糖尿病患者には脂肪肝とその進行形である非アルコール性脂肪肝炎が高頻度に合併していることにいち早く着目し、インスリン抵抗性が肝臓の脂肪化のみならず炎症、線維化をも促進させ、脂肪肝の成因の中心であることをモデル動物を用いた実験的に証明しました。更に、糖尿病の肝臓では小胞体ストレスが亢進し、その結果VLDLの主要アポ蛋白apoBの分泌が減少し脂肪肝が促進することから、脂肪肝の発症に小胞体ストレスが関与していることを明らかにしました。これらの研究成果は、脂肪肝が糖尿病患者の肝臓に生じる合併症であるという新しい観点からその発症機序の解明に迫るものであり、糖尿病合併症研究の発展に貢献すると評価されました。



## 日本病理学会

## 学術研究賞受賞

全陽博士 (平成十一年卒業)

全陽博士は、平成二十三年日本病理学会学術研究賞を受賞し、平成二十三年十一月十七、十八日に東京都日本教育会館で開催された第五十七回日本病理学会秋季特別総会において、A 演説 (受賞講演) を行いました。受賞テーマは「IgG4関連疾患…疾患概念の確立と病態研究」です。日本病理学会学術研究賞ならびにA 演説は、わが国で行われた病理学分野の研究で優れており、かつ蓄積された研究であることが選考趣旨となっています。全陽博士は、平成十一年本学医学部を卒業し、直ちに私どもの主催する形態機能病理学 (旧第二病理) に大学院生として入局し、胆道系の研究に着手しました。平成十四年からは、学位研究に加え、当時、実態の不明であった自己免疫性膵炎に合併する胆管炎の研究にも精力的に取り組み、この疾患がIgG4関連疾患であることを報告し、さらにこの疾患が全身に分布することを世界に先駆けて明らかにし、その成果の殆どを欧米の一流誌に発表しております。また、平成二十年から英国のKing's College 肝研究所のコンサルタント病理医に就職してからも、IgG4関連疾患の研究を続けています。IgG4関連疾患は、我が国から世界に発信された疾患であり、現在世界的な広がりを見せ始めています。全陽博士が今後も、この疾患の世界的指導的研究者の一人として、活躍されることを期待しています。(中沼 安二 記)

## AHA Resuscitation Science Symposium 21

## Young Investigator Awardを受賞

藤井 怜 (平成十九年卒業)

二〇一一年十一月十二日～十三日アメリカ合衆国フロリダ州オーランドにて開催されたAmerican Heart Association (AHA) Resuscitation Science Symposium にてYoung Investigator Awardを受賞しました。受賞テーマは「Low dose atorvastatin improves mortality and inflammatory response in endotoxin-induced shock in rats.」です。今回受賞した研究は、以前より本学附属病院集中治療部と麻酔科蘇生科が行っている共同研究の一つで、高脂血症治療薬の

.....

## 鈴木紘一メモリアル賞と日本メイラード学会

## Young Investigator Awardを受賞

韓 冬

平成二十三年九月二十一日～二十四日に京都国際会館で開催された「第八十四回日本生化学会大会」で、本学大学院医学系研究科血管分子生物学研究分野博士課程四年生の韓冬さんが鈴木紘一メモリアル賞 (優秀プレゼンテーション賞) を受賞しました。発表演題は「Pattern-recognition receptor RAGE in the pathogenesis of pancreatic beta cell failure in type 2 diabetes」でした。

一つであるatorvastatinの内服がラットのエンドトキシン誘発性ショックモデルに対して抗炎症作用を示し予後を改善することを明らかにしたものです。授賞式は十一日にオーランドの一角にあるレストラン、Cuba Libreで行われました。Young Investigator Networking Eventと併せて催されたため、各国からの若手研究者二十数名と情報交換を行うことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。本共同研究は、二〇〇七、二〇〇九、二〇一〇年と過去三回同賞を受賞し、今回は四回目の受賞となりました。ご指導をいただきました山本健教授、谷口巧臨床教授をはじめ、教室の先生方、関係の皆様方に心より御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

.....

この賞は同大会で優れた口頭・ポスター発表を行った若手研究者に授与されます。韓さんは平成二十三年十月二十八日に東京ステーションコンファレンスで開催された「第二十一回日本メイラード学会年会」でも引き続きYoung Investigator Awardを受賞しました。

韓さんは、これまで不明であった2型糖尿病における膵β細胞疲弊のメカニズムに関して、自然免疫に関わるパターン認識受容体receptor for advanced glycation end-products (RAGE)に着目し、新しい概念を創出したことで高い評価を得ました。今回の成果は、2型糖尿病の病態メカニズムの解明とそれに基づく治療の開発に大きく貢献することが期待されます。(山本 靖彦 記)

## 秋の叙勲

瑞宝中綬章

津川 龍三

(昭和三十年卒業)

瑞宝中綬章

久保 正

(昭和三十三年卒業)

旭日双光章

加藤 義博

(昭和四十六年卒業)

現行の規程では、大学院生は学部・学類学生とは異なり準会員として扱われることなく修了後に漸く通常会員となりませんが、会報編集委員会は、本学の学問業績のかんりの部分が大学院生の若い力によって担われていることに鑑み、同窓会・学友会の裾野を拡げ、また、本学の教育研究をより一層発展させるため、今後、全国規模および国際学会での受賞を対象に院生の受賞も掲載することとしました。各位のご理解とご協力を賜れば幸いです。

(会報編集委員会)

## 学会報告

第五十二回日本組織細胞  
化学会総会・学術集会

平成二十三年九月二十四・二十五日の二日間、十全講堂および医学類校舎において、第五十二回日本組織細胞化学会総会・学術集会を開催しました。組織細胞化学は、細胞や組織における分子の局在や機能を可視化し、主に顕微鏡を用いて調べることに、主に生体機能を形態学の基盤のもとに研究する学問です。これまで酵素組織化学、オートラジオグラフィ、免疫組織細胞化学、FISH、ハイブリダイゼーションなどの技術が開発され、広く用いられてきました。二〇〇九年に創立五十周年を迎えた日本組織細胞化学会は、解剖学者、病理学者を中心に、生物学者、臨床医学研究者、臨床検査関係の研究者等により構成されています。今回は全国から約百五十人が参加して、特別講演一題、受賞講演二題、シンポジウム四セッション、ワークショップ二セッション



ン、一般講演二十二題、ポスター四十六題の発表が行われ、好天にも恵まれて大過なく終了しました。

まず高速原子間力顕微鏡の開発者である金沢大学理工研究域の安藤敏夫教授による特別講演「タンパク質分子の構造と動的挙動の高解像度撮影」では、リアルタイムでの生体分子の動きの映像が好評を得ました。シンポジウムでは、「レポーター遺伝子発現マウスを利用した組織化学的研究の新展開」及び「組織化学と分子イメージング・ミクロからマクロまで」において新しい組織細胞化学的技術や研究法を取り上げました。器官レベ

第四十八回全国国立  
大学病院手術部会議

第四十八回全国国立大学病院手術部会議が、金沢大学を幹事校として、平成二十三年十一月十三日(日)、十四日(月)の両日、ホテル日航金沢で開催され、全国から総勢百三十五名が参加しました。この会議は、昭和三十九年に全国国立大学病院中央手術部連絡協議会として始まり、毎年、国立大学病院の手術部部長、副部長、看護師長が集まり、手術部の現況集計、問題提起、その対策等を議論し、手術部運営を円滑に行う事を目的として活動しています。

今回は特別講演として、福島県立医科大学病院長の村川雅洋先生に「東日本大震災と福島県立医科大学」と題して講演していただきました。未曾有の大震災とそれに続く原子力発電所の事故が昨年三

ルのイメージングでは本学の絹谷清剛教授に講演をお願いしました。学会の高松賞を受賞した名古屋大の藤本豊士教授による講演「電顕で脂質を見る」及びワークショップ「組織細胞化学における電顕の活用」では、電顕的組織化学を駆使した研究が紹介されました。また病理系の二つのシンポジウム「DNA in situ hybridizationの病理診断への応用」及び「肝胆膵研究の新展開」では、それぞれ本学の大井章史教授、佐々木素子准教授にオーガナイザー兼座長の労をお取りいただき、また本多政夫教授に講演をお願いしました。さらに、初の試みとして

月におこり、日本中が注目している福島大学の大学病院管理者としてのお話は、大学病院の災害対策を考える上で非常に貴重なものでした。

もうひとつの特別講演として、文部科学省大学病院支援室の島居剛志様より、「大学病院における諸課題について」と題する講演をいただきました。東日本大震災に関する大学病院の取り組み、人材養成、メディカル・イノベーション、医療安全・院内感染等の現在の大学病院の活動、大学病院の抱える課題点を洗い出し、その対策を検討するものであり、大学病院に対する客観的評価は多くの関係者が興味を持つ内容でした。

全国国立大学病院手術部会議幹事会は毎年アンケート調査を行っており、手術部将来計画、教育・研究、手術部稼働・職員、物品・安全管理に関するアンケート結果の報告が行われました。北海道・東北ブロック会議の報告では、北海

日本唾液腺学会との共催ワークショップ「組織化学から見た唾液腺の正常と異常」を行いました。学会期間中、キンストレーキの展示してある医学部記念館資料室を公開し、本学の創立百五十周年のよい宣伝になったと思います。

組織細胞化学会のように、異なる専門分野の研究者が共通の方法論への興味で結ばれて情報を交換し合う学会は貴重な存在であるという感を深くいたしました。最後に、ほとんど手作りの学会運営にご協力くださった教室員や学生諸君に感謝申し上げます。

(井関 尚一 記)

の各ブロック会議で議論された内容が報告され、全国にも関連のある話題には多くの質問がされ、議論が深まりました。提案議題としての、災害対策、手術部教育、業務・運営に関する検討、スタッフの待遇改善に関する要望等が話し合われ、活発な議論がされました。特に今回の東日本大震災についての関心は高く、東北大学の震災当日の術野画像、術野の音が公開されましたが、あまりの地震の激しさに、参加者は改めて驚いた様子でした。

会議終了後には、懇親会が催されました。手術部職員が他病院の情報を知る貴重な機会として情報交換も活発に行われ、参加者の親睦も深められ、有意義な時間となりました。

今回の全国国立大学病院手術部会議の開催にあたり、多くの方々にご支援をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

(手術部准教授 伊藤 博徳 記)



# 会報と記念誌で編む母校の歴史

編集委員 山本 博

万葉集の有終の美を飾る家持歌「新しき年のはじめの初春の今日降る雪のいや重け吉事」ながら、本学は二重に記念すべき新春を迎えた。今年、金沢大学医学部は創立百五十年を迎え、そして今号、金沢大学医学部十全同窓会会報（以下、会報）は百五十号を数える。この機会に、本学の歴史を伝えてきた校史と会報の意義を考え、併せて今後への二・三の提言を試みたい。

## 一、歴史を書くことは科学論文を書くことと似ている

金沢大学医学部創立百五十周年記念誌（以下、記念誌）が今秋刊行の運びとなる。

昨春、歴史の専門家から「大学史の編纂には、書くこととする長さの十分の一の時間を要しますよ」といわれた。なるほど、「金沢大学医学部百年史」（以下、百年史）は、編纂に十年の歳月を費やし、創立から百十年目に刊行された。なぜ、斯くも時間がかかるのか？ 歴史資料は一般に、当代の人間が残した一次史料と後代の人間が編纂した二次史料とに分けられ、歴史編纂は努めて前者に基づいて行わなければならないからである。エビデンスに基づいて書かれる点で、歴史を書くことと科学論文を著すことに本質的な違いはない。

百年史編集委員会（西田尚紀委員長）は、丹念に一次史料にあたった。これ故に、十年に亘る作業となり、八百ページを超える大冊となったのである。「西田教授は、精励の余り、眼筋麻痺におかれ」と倉知與志先生は記されている（百年史「百年史刊行に当って」）。百年史は神田古書街でもっとも高価な大学史の一つという。この一事にても、私たちの先輩が後世の評価にたえる仕事をされたことが彷彿とする。

## 二、先輩たちに助けられて

こういう百年史を継承するのであるから、記念誌に求められるクオリティーはいやがうえにも高く、それを編もうとするものへのプレッシャーは大きかった。近年、大学史自体を研究対象とする学会もあるので、尚更にい加減な仕事はゆるぎされない。本校の先に医学部創立百五十周年を迎えた長崎大と東大は遅滞なく記念誌を発行した。諸経費見積りのため、ドラフトは発行予定の一年ほど前までに用意されていなければならない、という手続き上の要請もあった。連日「日暮れて道遠し」の想いを抱きながらの作業がつづいたが、幸いにも、平成二十三年九月初稿の完成を見、会報第百五十号発行と時を同じくして記念誌の購入申込みを開始しうるに至った。

記念誌編纂は結果として「十五年」を要せずに済みそうであるが、この僥倖はつぎの諸点に負うところが大きい。

第一は、「金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み」（山口成良編集委員長（以下、以後三十年の歩み）が刊行されていたことであった。これにより、資料の散逸が防がれ、百年史以後三十年の歩み、記念誌と着実にバトンが受け渡された。この効果は、とくに教室史に顕著に現れ、平成二十三年夏までに全教室からの原稿が揃った。

第二は、「医学部百五十年史のための覚え書」と「十全同窓人物伝」が、それぞれ寺畑喜朔先生、赤祖父一知先生と、多留淳文先生、山口先生ほかによつて会報に連載されてきたことである。今号までに前者は三十三回、後者は二十一回を数えた。いずれも論文二報に相当しうる労作である。会報編集委員の任期は終身であり、尋常では叶わないような世代間の

コミュニケーションが担保されていることも、校史編纂を支える基礎となっている。

第三は、同封のチラシに記載した編纂委員会の構成からわかるように、百年史と以後三十年の歩みの編纂を経験された諸先輩ならびに本学ゆかりの第一級の医史学者の参画、指導、資料提供、執筆を得たことである。

第四は、熱心に編纂作業に携わる学内委員と献身を惜しまない事務員に恵まれ、また、資料提供、寄稿、論文・著書の引用・転載許可などで会員諸兄弟を含む多くの方々のご協力ご支援が得られたことである。

第五は、貴重な資料や図書類が、良好な状態で保存されてきていることである。チラシに示すように、中扉にはアトラスヌーボー、ドドネウス本草書、レーゼル昆虫図譜など、当地ならではの稀観本からの写真を使用した。

## 三、記念誌編纂のころよく日本一だった

記念誌では、濫觴となった彦三種痘所以後の歴史を鳥瞰するだけでなく、種痘所前史にも頁を割いた。徳川家と優に拮抗できる実力を有しながら、軍事を捨て文化・学術面で日本一を目指した加賀藩の姿勢は、医学・医療の分野にも浸透し、前身校を含む金沢大学医学部の精神的バックボーンの一つとなったと推察されるからである。

当地の医学は日本一だったことが何度もある。利家統治時代の能登に、わが国医療界の最高権威であった施薬院をも凌ぐ医学技術が存在した可能性、稲生若水・新助二代に亘る、漢書「本草綱目」を上回る博物書「庶物類纂」一千巻の編纂、日本で最初にダーウインほかを紹介した金沢医学館のオランダ医学、医学部現役教授に三人の日本学士院賞受賞者を擁した一九五〇年代、等々。

日本一、世界一がどれだけあるかによつて大学のランクが決まるだろう。故に往事を述べ、来者を思う（司馬遷）。記念誌も主として過去を書くが、先達に学び、後進が一人でも多く、日本一、世界一を目指してほしい、との想いが

胸中にある。

## 四、思来者―今後への二・三の提言

百年史「編纂を終えて」で「二十五年間区切りで、小史を編さんする必要がある」と寺畑先生が提言され、これは以後三十年の歩みとして実現された。記念誌はその後につづく「小史」の一つとも位置づけられる。本学の歴史の継承と資料の保存を確保するため、二百年史を待つのではなく、百七十五年史の刊行とそのための時宜を得た体制づくりを行うことを、まず、第一に提言したい。

大正十五年五月に催された金澤医科大学開學式を本学の史上もっとも盛り上がった行事とすることに異を唱える人は少ないだろう。十全會の名の下、医学会、同窓会、校友会が渾然一体をなしていた古きよき時代で、教員事務官、ナースを含む教職員が各人一つ以上の役割を担い、全学一丸となつて大学昇格を祝った。第二に提言したいのは、本年行われる創立百五十周年記念式典・祝賀会等も可能な限り多くの教職員、学生、同窓会員が集う行事とし、団結をつよめる契機とすることである。

これに関連して、第三に、同窓会をより寛やかな組織とすることを提言したい。これは、創立百五十周年記念の諸事業の支援にとどまらず、本学の総合力を高めるうえで肝要と考えられ、具体的には、教員、研究者、学士・修士・博士課程学生が出身を問わず等しく構成メンバーとなり、誇りと責任感と愛情をもって本学の発展に主体的に寄与しうるような会員のあり方を追求することである。

会報は本学のさまざまな出来事を報じてきた。第一号から第百五十号に至る記事の中には、第一級の歴史資料とみなしうるものが少なくない。今後ひきつづき、会報の紡ぐ糸が将来の校史の随所に鑲められるよう、記事の素となる研究・教育・診療・社会貢献活動上のシーズ・ニーズの創出、蓄積と、編集・編纂の持続を祈念し、本論説を了える。

## 「金沢大学発祥の地／彦三種痘所跡地」と 「金沢医学館跡地」の石碑建立される

彦三種痘所の推定跡地と金沢医学館跡地に石碑が建立された。

彦三種痘所の所在地は長らく不明であった。「金沢大学医学部百年史」や「金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み」編集



写真2

学創基百五十年記念事業として石碑が建立され、平成二十三年十一月五日に除幕式が行われた(写真1)。写真2に示すように石碑左面には「金沢大学発祥の地」(中村信一学長揮毫)、正面には「彦三種痘所跡地」(竹田亮祐十全同窓会顧問揮毫)、右面碑文には「当時恐るべき災厄であった天然痘を種痘により未然に防ぐため加賀藩は一八六二(文久二)年三月に彦三種痘所を開設し 黒川良安 津田淳三 大田美農里 高峰元桂 鈴木儀六 伏田元幹ら計二十五名の医師がこれに参画した 彦三種痘所は、この地に存在したと推定され



写真1

卵辰山養生所 金沢医学館 石川県甲種医学学校 第四高等学校医学部 官立金沢医科大学 国立金沢大学へと続く系譜の淵源となった二〇一一(平成二十三)年十一月 国立大



写真3

学法人金沢大学」と記されている。

「金沢医学館跡地」の石碑は、金沢大学医学部創立百五十年記念事業として、金沢市大手町三番二十一号の金沢市医師会館前に建立され、平成二十三年十一月六日に除幕式が行われた(写真3)。「金沢医学館跡地」の揮毫は中村学長による。右面に、昭和二十六年卒業の寺畑喜朔先生と井関尚一医学類長・金沢大学医学部創立百五十年記念事業推進準備委員長によるつぎの碑文が記されている。「明治三(一八七〇)年二月 金沢藩はここ大手町津田玄蕃邸跡

に金沢医学館を開設した 翌年三月蘭医スロイスが着任し 西洋医学の教育と診療を開始した その後金沢医学館は官立第四高等学校医学部 金沢医学専門学校 金沢医科大学 国立金沢大学医学部に継承されて今日に至る 校舎と病院は明治三十八年から四十五年にかけて小立野に移転するまでこの地にあった 金沢医学館の建物は兼六園に移築されて現存し跡地には金沢市医師会館がある 平成二十三(二〇一一)年十一月 金沢大学医学部創立百五十年記念事業推進準備委員会」。石碑に向かい、右手には、明治十一年十月の明治天皇巡幸を記念する碑が立ち、左手には、この折医学館学生金子治郎と庄田喜太郎が行った御進講の成功を記念しホルトルマンによって植えられた松がいまも聳える。

(編集委員 山本 博 記)

ご住所やご勤務先など異動の際には  
左記事務局宛にご連絡下さい。

十全同窓会事務局

TEL 〇七六二六五二二三

FAX 〇七六一三四四二〇八

住所 千九二〇八六四〇

金沢市宝町二二一

E-mail juzen@med.kanazawa-u.

ac.jp

URL http://juzen-ob.w3.kanazawa-

uac.jp/



# 十全学術行脚

## 第三十二回

### —金沢医科大学臨床医学・外科系—

臨床系講座は、昭和四十七年の大学設立以来、教育・研究を行うとともに診療の場として(一)一般病院では困難な高度な医療の提供、(二)医学進歩のための高度な医療技術の開発と評価、(三)良医育成のための高度な医療に関する臨床研修を行う病院として昭和四十九年九月に開院した金沢医科大学病院を中心として高度先進医療から地域の基幹病院としての役割を担ってきました。

今回の学術行脚では、現職の教授・准教授・講師の在籍される臨床医学・外科系の各講座・部門における学術内容を紹介いただきました(講座の五〇音順)。

一、小坂健夫・部門教授、野口昌邦・特任教授、上田順彦・臨床教授、中野泰治・臨床准教授、表和彦・准教授、木南伸一・准教授、舟木洋・講師(一般消化器外科)



御紹介いただきました。

小坂健夫教授(京都大学卒業、昭和六十年大学院修了)は、平成三年に金沢大学から赴任し、平成二十年七月から講

一般消化器外科講座には、多くの同窓会員が在籍されています。小坂教授から各会員を

座主任教授に昇任しました。専門は胃・大腸癌を中心とした腫瘍外科で、個別化治療を目指して幽門や肛門機能の温存手術、また治癒切除困難な進行癌に対しては、バイオマーカー探索とともに、術前薬物治療で腫瘍をダウンステージさせ、根治手術を安全確実に実施しています。手術が好きなら若手医師が集う医局を目標にしています。時節の催しは欠かさず皆で楽しむことと、週一〜二回のジムと年一回の登山を目指しています。



野口昌邦特任教授(昭和四十四年卒業)は、平成二十一年に金沢大学から特任教授として赴任し、乳腺内分泌外科を開設しています。専門は乳癌や甲状腺癌の外科であり、乳癌手術ではムービングウインドウ法による新しい乳房温存手術を開発し、また、腋窩リンパ節郭清後の浮腫を

予防する目的で蛍光色素によるアームを開発し、その有用性を検討しています。なお、平成十七年に中国衛生部中日友好病院(北京市)の名誉教授に就任しておりますが、最近、同病院に乳腺・甲状腺セクターが新設されたことから、これらの乳癌手術を学ぶため、九月に黄林平教授が研修に訪れる予定です。



上田順彦臨床教授(昭和五十八年卒業)は、平成二十一年に浅ノ川総合病院から臨床准

教授として赴任し、平成二十三年から臨床教授に昇任しました。専門は肝胆脾外科と内視鏡外科で、進行癌に対する放射線、薬物治療を併用した拡大手術を積極的に行っています。また腹腔鏡補助下肝および脾切除などの低侵襲手術を導入しています。自分の手術の更なる向上を目指すとともに、手術・検査手技などを若手医師にいかに関与するかを日々考えています。



中野泰治臨床准教授(昭和五十八年卒業)は、平成五年に赴任し、平成二十一年から臨床

准教授に昇任しました。専門は乳腺・内分泌外科、消化器外科、内視鏡外科です。リスクマネージメントの手術を基本としています。趣味は旅行(史跡と祭り)です。



表和彦准教授(昭和六十二年卒業)は、平成十九年に金沢大学から講師として赴任

し、平成二十年から准教授に昇任しました。専門は消化管外科、内視鏡外科です。高度進行大腸癌に対しては術前薬物治療で腫瘍をダウンステージさせ、根治手術を安全確実に行うことを目標にしています。また早期大腸癌に対しては腹腔鏡手術等の低侵襲手術を積極的に導入しています。



木南伸一准教授(平成二年卒業)は、平成二十一年に金沢大学から准教授として赴任しま

した。専門は胃癌外科、内視鏡治療です。リンパ節転移の病態制御および早期胃癌機能温存根治手術が研究テーマで、腫瘍学ならびに生理学に立脚したオリジナルな外科治療の構築を夢見しています。多忙な臨床を前に日々是血戦な毎日ですが、家族とアニメを生きるヨスガに、頑張っています。

舟木洋講師(平成八年卒業)は、平成二十一年に金沢大学から助手として赴任し、平成二十三年から講師に昇任しました。専門は食道疾患、胃癌治療です。広く消化器外科を診療しながら専門性を深めていきたいと思っています。



佐々木洋教授(昭和六十二年卒業)は、自治医科大学眼科学教室に入局し、清水晃幸

教授のもと白内障手術、網膜硝子体手術、ぶどう膜炎の臨床を学び、平成五年〜七年に米国のオーストラリア大学眼研究所で水晶体の酸化ストレスに関する研究を行い、平成八年に金沢医科大学眼科学教室に講師として赴任しました。平成十七年五月から同教室部門教授として水晶体・白内障の基礎および臨床研究、紫外線と眼疾患に関する疫学研究、眼光学、眼薬理、電磁波による眼障害に関する研究を行っています。特に水晶体・白内障につ

いては、臨床、疫学、基礎研究の全てを網羅しており、スタッフも揃ってきましました。この分野での世界有数の研究機関になり、多くの新知見を発信し眼科医療に貢献することを目標に、今後も頑張っていきたいと思います。また、北川和子・臨床教授（昭和四十六年卒業）は、平成二十二年に定年退職後も眼科学教室で研究・臨床に従事されています。

### 三、川上重彦・部門教授（形成外科学）



川上重彦教授（昭和五十一年卒業）は、形成外科学を担当されるとともに金沢医科大学

学病院長をお勤めです。

金沢医科大学形成外科科学教室は、昭和四十九年に金沢大学皮膚科より塚田貞夫講師（金沢大学昭和三十二年卒業）が初代主任教授として着任された。二代目講座主任として平成九年に川上重彦教授が助教授より昇任して現在に至っている。現在教室のスタッフは二十名で、そのうち十全同窓会会員は四名を数える。教室開設当時のスタッフは、全員金沢大学卒であったが、現在は金沢医科大学、富山大学、福井大学など多くの大学からの卒業生で構成されている。年間手術件数は一、二〇〇件を数え、北陸地区唯一の形成外科科学講座として機能している。主な診療領域としては、口唇・口蓋裂に代表される表在性先天異常疾患、皮膚腫瘍・母斑の治療、頭頸部癌や乳癌治療後の再建治療、切断指などの手外科、頭蓋・顔面骨の骨格性先天異常、顔面外傷、熱傷、下肢難治性潰瘍、褥瘡など

多岐にわたっている。また、平成十六年からは正しい医学的理論に基づいた美容外科診療も開始している。全国規模や国際学会を数多く開催しており、川上教授のもとでは、第三十三回日本熱傷学会（二〇〇九年六月）、第五十三回日本形成外科学会（二〇一〇年四月）が開催され、二〇一二年には第十四回日本褥瘡学会の開催を予定している。

### 四、笹川寿之・准教授（産婦人科学）



笹川寿之・准教授（昭和五十八年卒業）は、金沢大学卒業後、大阪大学医学部産婦人科

に入局、五年の研修の後に大学院入学、平成四年に大学院を修了しました。その後、英国ケンブリッジ大学に留学、帰国後は金沢大学産婦人科助手、保健学科准教授を経て、平成二十一年九月にこちらにまいりました。大学院生時代からヒトパピローマウイルス（HPV）の研究を続けています。マウスを用いたHPVの発癌実験を手始めに、英国では、現在、小中学生に接種されているHPVワクチンの開発に従事しました。金沢大学では、新規HPV-DNA診断法の開発、子宮頸癌や性感染症に関する疫学研究、HPVの免疫応答やワクチンに関する研究などを行ってまいりました。

現在、金沢医科大学では、婦人科腫瘍の診断と治療を専門にしており、子宮頸部前がん病変に対する新規薬物療法の開発とBCGによる癌免疫治療を実践しています。また、女性に対する東洋医学的診断と漢方治療も手掛けております。

### 五、三輪高喜・部門教授、志賀英明・講師（耳鼻咽喉科・頭頸部外科学）



平成元年大学院修了）は、耳鼻咽喉科出身で、故梅田良三教授のもとで

より医学博士を取得後、古川仰教授のもとで嗅覚の基礎的ならびに臨床的研究を続け、准教授を経て、平成二十一年から耳鼻咽喉科・頭頸部外科学部門教授として赴任している。大学院時代から一貫して行ってきた嗅覚の基礎研究と臨床は、金沢医科大学に赴任した後も継続しており、赴任と同時に嗅覚外来を金沢医科大学病院に設置した。嗅覚外来は国内では少なく、全国各地から患者が来院している。さらに新たな嗅覚検査法の開発にも取り組みとともに、手術、薬物療法と様々な方法を駆使した治療法を手掛け、わが国における嗅覚臨床の中心的役割を担っている。平成二十三年十月には、日本味と匂学会第四十五回大会を会長として主催した。

志賀英明講師（平成七年卒業）は、古川仰教授のもとで指導を受け、二度にわたる米国留学の後、助教を経て、平成二十一年から三輪高喜教授とともに本学に講師として赴任した。金沢大学在任中から嗅覚の研究を始め、嗅粘膜から脳内へのアイソトープ移行を応用した嗅覚機能評価法に関する研究を、本学へ移籍後も継続して行っている。本研究は、げっ歯類を用いた基礎的研究から、正常人や嗅覚障害患者を対象とした生体による研究まで発展している。研究内容が評価さ

れ、平成二十二年度の優良教員（研究部門）として表彰された。研究とともに、指導教員として学生の指導にも熱意を持ってあたっている。

三輪高喜教授、志賀英明講師ともに、若い教室員ともども、「良医を育てる」の建学の精神に則り、研究、教育、臨床に励み、教室の発展に日々研鑽努力している。

### 六、松本忠美・部門教授、川原範夫・特任教授、兼氏歩・准教授、杉森端三・講師（整形外科学）



これまでも多くの同窓生が、整形外科教室に在籍されている。現在在籍中の先生方を

松本教授（学校法人金沢医科大学・副理事長）より御紹介いただいた。

松本忠美教授（昭和五十一年卒業）は、整形外科の富田勝郎名誉教授のもとで助教授を一〇年務められた後、平成十一年に金沢医科大学整形外科整形外科に主任教授として赴任している。臨床においては股関節外科を専門としていて、人工股関節置換術、各種の骨切り術など約四、〇〇〇例の股関節手術を行っている。又、研究においては特発性大腿骨頭壊死症の病態解明を行っており、その発生に酸化ストレスが重要な働きをしていることを証明し、ビタミンE（抗酸化剤）の投与により壊死発生が予防出来る可能性を示した。又、臨床研究において日本人股関節の形態計則を行い、日本人の変形性股関節症に合った人工股関節を開発し、臨床に実用化している。整形外科教室には



金沢大学出身の川原範夫特任教授（昭和五十八年卒業）、兼氏歩准教授（平成三年卒業）、杉森端三講師（平成四年卒業）がいる。



川原範夫教授は脊椎外科が専門で、腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症、頸椎性

性脊髄症、頸椎後縦靱帯骨化症などに対する除圧・固定術はもちろんのこと、化膿性脊椎炎、側弯症などの脊柱変形、脊椎転移ガンなどの難治性疾患の治療もを行っている。



兼氏歩准教授は股関節外科が専門で、人工股関節に関するバイオメカニクスの研究を行

っている。杉森端三講師は膝関節外科が専門で、人工膝関節置換術や靱帯再建術などを積極的に

七、飯塚秀明・部門教授、立花修・特任教授（脳神経外科学）



飯塚秀明教授（昭和五十五年卒業）は、卒業後直ちに金沢医科大学

病院脳神経外科学教室（角家暁教授）に入局、脊髄脊髄疾患、脳血管障害の臨床および基礎研究に携わり、平成九年に脳神経外科学特任教授、平成十一年に部門教授に就任した。平成二十二年に金沢医科大学病院長を務め、平成二十二年から金沢医科大学副学長に就

任している。診療活動では、開講時から取り組んできた脊髄脊髄疾患の治療、良性脳腫瘍の外科治療、脳血管障害の外科治療に力を入れている。地方に位置する私立医科大学として、医学教育・診療・研究活動の充実に向けて努力していき



立花修特任教授（昭和五十八年卒業）は、脳腫瘍、間脳下垂体腫瘍の外科治療およ

び基礎研究をおこない、その後、悪性脳腫瘍の遺伝子発生機序、細胞死の機序の研究にたずさわ



鈴木孝治教授（昭和四十八年卒業）は泌尿器科に入局、直後に高岡

市市民病院で勤務。昭和四十九年新設の金沢医科大学泌尿器科助手となった。津川龍三教授（現名誉教授）の指導の下、諸先輩と共に石川県において昭和五十年三月二十四日に第一例目の生体腎移植を成功させた。泌尿器科一般の手術、腎尿路悪性腫瘍手術をはじめ、副甲状腺全摘除および前腕自家移

## 教授退職記念講演会・記念式のお報せ

植術、先天異常の手術も実施してきた。腎移植は現在まで、生体二三四例、死体五十七例を実施し腎移植を担当する多くの医療関係者を育成してきた。北陸ではじめての体外衝撃波結石破砕治療を実施し、尿路結石の最新治療を導入してきた。尿路結石研究のため豪州留学を機に腎結石を阻止する高分子物質の解析に勢力を

本年度を以って退職される脳細胞遺伝子学分野（旧細胞遺伝子学）東田陽博教授の記念講演会ならびに記念式が左記のとおり開催されますのでご案内いたします。

### 一、記念講演会

日時 平成二十四年三月三日（土）

午後四時から

場所 十全講堂 ホール

演題 「脳記憶過程の神経化学的研究・社会性認識の記憶と忘却とその障害としての自閉症」

東田 陽博 教授

### 二、記念式

日時 平成二十四年三月三日（土）

午後五時から

場所 医学部記念館 会議室

なお、本年度は経費節約等のため、醸金者宛招待状は発送されません。ご容赦ご注意いただければ幸いです。

（松井 修 記）

十全同窓会ホームページが開設されました



<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

注いできた。平成九年からは金沢医科大学主任教授として、多くの泌尿器科医のみならず学生、看護師に泌尿器科の魅力ある領域を伝授してきた。現在は石川県臓器移植推進財団理事長、日本尿路結石症学会理事長、二十一世紀集学的治療センター長を務める。

（横山 仁 記）

## 病院紹介

### 公立穴水総合病院

#### 病院概況

公立穴水総合病院のルーツは、昭和三十一年二月に県立穴水診療所から移管した「町営穴水診療所」に遡ります。当時、国民皆保険制度実施への準備が進む中で、昭和三十一年四月には「穴水町国民健康保険直営診療所」となっており、五十六年を経たこととなります。昭和三十三年二月には、穴水町国民健康保険直営穴水中央病院となり、昭和五十六年に大規模な増改築を実施し、「公立穴水総合病院」となって、現在に続いています。この間、金沢大学医学部附属病院からは昭和四十三年に（故）柿下正道名誉教授を院長に迎えて一挙に医師と診療科が充実し、昭和五十六年の（故）山崎安朗先生の院長就任により整形外科を中心に病院は隆盛時期へと向かいました。

平成九年五月に全国自治体病院協議会・開設者協議会両会長表彰、平成十年五月に自治体立優良病院として自治大臣表彰を受け、昭和六十三年十一月に横井克己（前）病院長が全国国保診療施設協議会会長表彰を受けるなど病院の評価は高まり、平成十九年には全国国保地域医療学会を主宰することができました。

さて、穴水町の人口は、現在約一万人でひと頃の半分近く、高齢化率は三九・二％と、人口減少と高齢化進行が悩みです。これは能登北部医療圏全体の課題ですが、その中であって、今後の医

療ニーズの見通しに合わせる形で、平成二十一年三月に病床数を百七十七床から百床に削減しています。現在の診療科は、内科、外科、耳鼻咽喉科、整形外科、泌尿器科、産婦人科、眼科、皮膚科、検診科が十二名の常勤医師で運営され、小児科、放射線科、循環器科などが非常勤医師により運営されています。最近の外來患者数は一日約四二六人、入院患者数は約八五％で、平均在院日数は十五日程度となっています。

診断機器類は充実していて、全身CTは平成二十四年一月に六四列マルチスライスCTが更新稼働します。MRI診断装置も二十二年度に一・五テスラの最新型に更新しています。当院の特徴は、シンチレーションカメラを有して核医学診断が可能なこととです。画像読影診断は、非常勤の放射線科医と金沢医科大学への遠隔診断で対応しています。診療機能としては、リハビリテーション室は勿論、透視センター、検診センターなどを展開し、約二十分離れた兜地区に公立穴水総合病院兜診療所を開設しています。

情報システムにも力を入れており、平成元年に医事会計システムが導入され、順次栄養管理システム、検体検査システム、薬剤管理システムなどを導入し、オーダーリングシステムを整備してきました。平成二十四年度に電子カルテへ発展させる計画で、院内診療情報の共有化によるチーム医療推進、他病院や診療所、施設や在宅部門との情報連携システム目指して検討を開始しています。

#### 地域包括医療への取り組み

公立穴水総合病院は、国保診療施設として早くから「地域包括医療・ケア」に

努力してきました。平成十年に訪問診療・訪問看護を開始し、平成十三年には訪問看護二十四時間体制を実現しています。平成十四年に医療・福祉・保険総合窓口を開設、平成十五年には石川県へき地医療拠点病院の指定を受け、無医地区への巡回診療を担当しています。

平成二十三年四月から、これまでの訪問診療部門、訪問看護部門、訪問リハビリテーション部門、地域医療連携室に医事担当者を加えて、在宅療養支援センターとして統合発足させました。地域の病院や医師会との連携を深め、地域医療連携パスを通じて疾病管理体制を構築し、在宅療養支援病院へ発展させる方針です。

#### 総合医を始めとする医療人育成

能登北部医療圏の人口当たり医師数は石川中央医療圏の半分以下であるなど、医師不足は深刻で、石川県も地域医療再生計画の中で能登北部への医師充足を図っていますが、なかなか改善しません。これから奥能登に必要なのは、熱意と知識・技量に優れた総合医と思われます。それならば、「自分たちで総合医を育成しよう」と取り組みを始めています。平成二十二年八月に「能登北部地域医療研究所」を院内に設置し、初期臨床研修医の地域医療研修の募集を始めたところ、平成二十二年度は一名でしたが、二十三年度は十名となっています。後期研修として総合医育成プログラムを整備し、この十月に日本プライマリケア連合学会からプログラム認定（県下で三番目）を受けたところです。穴水町を中心にした当地域は、医療システムがコンパクトに纏まっている上に、研修のメニューの多彩さや関係職員、地元住民の熱意など、総合医を

目指す研修環境が整っているところです。

#### 今後の方針

地域医療の本道を求めます。何よりも、住民が求める医療を探り、住民から支えられる医療システムを目指さなければならぬと考えています。昨年来、病院内でこれまでなかったケースカンファレンスを軌道にのせ、チーム医療を推進しています。高度先進医療が必要な患者さんはいち早く高度医療機関に紹介し、安定した時期には後方病院として機能を発揮するとともに、生活習慣病など慢性疾患を地域ぐるみで丁寧に管理し、健康寿命を延ばすことを目指します。また、高齢者の生活を医療の面から守り、在宅での療養を望む方へは看取りを含めて積極的な支援できるようにしたいと考えています。課題・難問が山積していますが、職員一同頑張っています。是非一度、お立ち寄りください。（院長 倉知 圓 記）





## 病院紹介

## 福井県立病院

昭和初期には脳病院があつた「平岡山」という小高い丘の跡地に福井県立病院は建っています。昭和二十五年に福井県立病院百床と福井県立精神病院百五十床が創立されました。その後長い間、それぞれ独立して運営され発展してきましたが、平成十二年には組織統合され、平成十六年には屋上にヘリポートを有する十二階建の本棟が竣工、平成十九年にはこころの医療センター棟が竣工し現在に至っております。許可病床数は千八百二十床ですが、精神科医師不足から二病棟（百十五床）を閉鎖していることもあり、現在は九百二十五床で病床運用をしています。

当院は福井県で唯一の県立総合病院であり、多くの政策医療（三次救急医療、周産期医療、小児医療、精神科医療、災害医療、へき地医療）を担うとともに、三大死因である「がん」「脳卒中」「心疾患」さらには患者数の多い「糖尿病」、四疾病への対応を中心とした高度医療を担う急性期総合病院です。平成十九年から地域支援病院として着実に地域との連携を深め、紹介率五五・四％、逆紹介率七十六・五％であり、平均在院日数は一四・一日です。

医師数はスタッフや後期研修医を中心に、初期研修医を加えると百七十余名となります。言うまでもありませんが、当院は金沢大学出身の優秀なスタッフや大

学各医局から派遣して頂いている若手の医師から成り立っており、十全同窓会には心から深く感謝しております。

福井県立病院は七センターから成り立っています。それらは、中央医療センター、こころの医療センター、健康診断センター、救命救急センター、母子医療センター、がん医療センター、陽子線治療センターです。以下、順を追って代表的センターを紹介致します。

中央医療センターは福井県立病院の核心的部門です。特に内科系は内科、循環器内科、神経内科など三十三名からなり、さらに院内標榜ですが、消化器内科、呼吸器内科、内分泌代謝科、腎臓内科、血液・腫瘍内科、女性外来にグループ化されて診療活動をしています。

こころの医療センターは、福井県における精神科医療の中核的な機能を担っており、精神障害の早期治療から社会復帰までの専門的治療を行っています。主に急性期精神科医療と身体合併症を対象疾患としています。当院の強みの一つは、精神疾患の死亡例が非常に少ないことです。救命救急センターとの密接な連携のもと、精神疾患のどのような患者さんが搬送されてきても迅速な対応がとれます。

救急救命センターは福井県全域の救急患者を対象とする北米型救急（もちろん三次救急を含みます）を行っております。年間の救急外来受診者数は約三万人、救急車受け入れ台数は約三千台です。救急専門医五名と、レベルの高い全国公募の後期研修医を加えた十人を中心に福井県が全国から募集したキャリアアップコース医（県の指定する遠隔地病院勤務やへ

き地診療所へのローテーションをする）ともある医師）など合計十六名にて運営されています。救急医は三交替勤務で指導体制が確立していることには定評があります。これに一年目と二年目の初期研修医二十五人余が加わり、日夜福井県の救急を担当しています。もちろん診療各科はオンコール体制を敷きバックアップ体制は万全で、ウオーキンを含めて、決して患者を断らないことを当然のこととしています。

母子医療センターは福井県総合周産期母子医療センターを兼ねています。産科・婦人科、小児科あわせて十七名からなりますが、MEIC（母体・胎児集中治療室）は六床あり、常にハイリスク妊婦で満床の状態です。当院では年間約六百件の分娩を取り扱っていますが、母体搬送も多く、帝王切開率は三十％に及んでいます。NICU（新生児集中治療室）は十一床で常にフル稼働の状態です。

がん医療センターは平成二十一年に開設しましたが、外科を中心とした専門外来に加えて外来化学療法室を拡張することが決まっております。二つのがん専門

病棟（外科ならびに血液・腫瘍内科）も充実中です。手術につきましては内視鏡手術をより積極的に行っています。

さて、陽子線がん治療センターです。これは日本海側の陽子線治療施設であり平成二十三年三月に治療を開始しました。お陰さまで十二月初旬には治療終了あるいは治療開始された症例は既に九十例を越えました。今後は北陸三県のみならず、中京・関西圏からの患者さんにも対応出来るようにしたいと考えています。

最後になりましたが、当院は急性期総合病院を目指しています。しかし未だ「七対一」の看護体制に出来ず、医療レベルの面から、患者サービスの視点からも問題がある状態です。

（院長 山本 信一郎 記）



## 教室だより

## 機能解剖学分野

## (旧解剖学第二)



【教室の沿革】教室の歴史は、明治三十四年、第四高等学校医学部が分立し金沢医学専門学校となり、石川喜直教授が第二解剖学教室を担当したところまで遡ります。その後大正五年から佐口栄教授が、同十四年から岡本規矩男教授が、昭和十八年から石丸士郎教授が、同三十五年から山田致知教授が、そして同六十二年から田中重徳教授が教室を主宰しました。平成二十年の学域・研究域再編に伴い、教室名が金沢大学医薬保健研究域医学系脳医学専攻脳情報回路学講座神経分布路形態・形成学分野となり、平成二十一年に尾崎紀之が七代目の教授として着任したのに伴い、機能解剖学分野となっています。

【研究】痛みは生体の警告系として重要ですが必要以上に強い痛みや慢性的な

痛みは私たちを苦しめます。当教室では痛みのメカニズムの解明に取り組んでいます。なかでも内臓や筋骨格系などの深部組織の痛みは疾患や加齢に伴い頻度が高く、しかも皮膚とは異なった特徴をもつので、そのメカニズムを明らかにすることに特に力を入れています。

## 一、内臓痛メカニズム

## (一) 胃の痛みを受容するメカニズム

定量性再現性のある動物モデルを開発し、機械刺激による胃の痛みの受容伝達には大内臓神経が関わっていること、胃の一次知覚神経は機械刺激や熱、化学物質に反応するポリモーダル受容器であること、機械刺激の受容にはMAPキナーゼのリン酸化が関わっていることなどを明らかにしてきました。

## (二) 胃の疾患に伴う痛みのメカニズム

潰瘍や炎症による胃の痛みには、神経成長因子による電位依存性ナトリウムチャネルの活性化を介した、胃の知覚神経の感作が関与していることを明らかにしました。近年は明らかな病変が無いにもかかわらず上腹部症状を呈する機能性胃腸症の病態の解明に取り組んでいます。

## 二、痛みの基礎的メカニズム

痛みのメカニズムは、臓器や疾患によって異なるため、さまざまな動物モデルを作成し、その解明に携わってきました。抗がん剤シスプラチンによる神経因性疼痛には、ATPの受容体(P2X)や酸受容体(ASIC)の発現の亢進が関与していることを明らかにし、最近では末梢動脈疾患に伴う痛みの新たな動物モデルを開発し、P2X<sub>3</sub>やASICsが関与していることを明らかにしています。また筋筋膜性疼痛症候群の動物モデルを開発し、再生筋細胞に発現する神経成長因子による末梢知覚神経の感作や、脊髄マイク

ログリアの活性化が筋痛に関与していることを明らかにしています。神経成長因子の筋痛への関与は、デンマークの研究室とのヒトを用いた共同研究でも明らかにされ、治療上の標的として注目されます。慢性脾炎、虚血による心臓の痛みや、薬剤による血管痛のメカニズムの解明についても解析を進めています。

## 三、内臓の痛みから筋骨格系を含めた深部組織の痛みのメカニズムの解析へ

近年、皮膚の痛みの分子メカニズムが急速に解明されつつあり、それらを標的とした新しい痛みの治療法が提唱されています。今後は皮膚での知見を踏まえつつ、皮膚とは異なった特徴のある深部組織の痛みのメカニズムを明らかにすることが重要と考えています。

## 四、内臓の自律神経分布と臨床応用

当教室の研究のうち一つの柱は臨床応用を念頭においた内臓の自律神経分布についての研究です。哺乳類の始祖として齧歯目よりもヒトに近縁な食虫目の実験動物スナクスを用い、全載標本を用いた免疫組織化学法により内臓の自律神経系を三次元的に可視化し、肉眼解剖で観察可能な範囲を超えた精密な解析を行い臨床で見られる問題を解明するものです。脾臓の神経分布に基づいて脾臓の進展様式を考察した研究は広く引用されています。また、スナクスには内臓脂肪がほとんどないことに着目し、肥満予防の基礎研究にも取り組んでいます。

## 【教育】一、学部教育

二年次に「人体の正常構造」の講義・実習を担当し、系統解剖学・局所解剖学の講義実習を行っています。実習では丁寧な解剖作業と詳細な観察に基づいたスケッチの提出を学生に求めています。放射線科や耳

鼻科などの協力の下、臨床的な視点にたった講義・実習指導や、学外非常勤講師による最先端の研究を紹介する機会も設けています。また、御遺骨返還式・合同慰霊祭等の行事を通し篤志献体の理念、生命の尊厳の理解を促し将来人の命を預かる医師としての責任の重大さを認識させるようつとめています。三年次後期の「病態生理・基本的基礎配属」では臨床あるいは発生学的な観点に立った人体の肉眼解剖学的研究や基礎的研究を行う機会を設けています。そのほか一年次の「初学者ゼミ」を分担しています。

## 二、大学院教育

修士課程では「人体構造学」における肉眼解剖学の講義や、「生命倫理学」の一部を分担しています。博士課程では初期総合カリキュラムの「基礎系教育セミナー」や英語による国際総合医学コース「最新医科学英語」の一部を分担し、疼痛メカニズムの講義をしています。大学院生には教室内セミナーでの討論に加え、学会発表や共同研究への積極的な参加を求め、研究の発展をはかっています。また、教室で進行中の研究成果について総説的なセミナーを年に数回update seminarとして開講しています。

【おわりに】生物が普遍的に備えている警告系としての重要性を損なうことなく、患者を救うことを目的に、痛みのメカニズムを明らかにする基礎的研究を進めていきたいと考えています。また、解剖学教育は専門知識の習得に加え、人間教育として重要と考えます。皆様のご協力を得ながら、確かな知識と倫理観を備えた優秀な医師、医学研究者を育てていきたいと考えております。同窓会のみなさまには今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

(易 勤 記)



## 教室だより

## 脳情報病態学

## (旧神経精神医学)

脳情報病態学では、三邊義雄教授を始めとし教員十名、医員五名、博士研究員二名、秘書及び研究補助員八名の体制で、日々の臨床、教育、研究業務を行っておりそれぞれについて報告させていただきます。

(臨床) 外来診療では、年間延べ患者数は平成二十二年度で二九四〇一人と全診療科でもっとも多く、新外来患者数も五三五人を数えます。また身体疾患における精神症状への対応は、精神疾患における身体症状への対応と並び、総合病院精神科のリエゾン医療における中核的な業務であり、その件数も多いのが現状です。実際に、初診者数の約三分の一が、他の診療科からの院内紹介であり、入院・外来で治療中の身体疾患にお



る精神症状への対応についての相談に積極的に応じています。病名別内訳では、うつ状態、せん妄、不眠、適応障害、不安障害、物質関連障害、身体表現性障害などの順に多く、ほぼ全ての診療科からの相談に応じています。また、大量服薬などの自殺企図患者も受け入れている上に、石川県の精神科救急にも輪番病院として参加していることから、時間外救急外来患者数も、全診療科で一、二番の多さです。さらに最近は緩和ケアに精神科が中核として参加するなど、他診療科から精神科的対応を積極的に評価する傾向が拡大している状況です。また平成二十年四月からは、子どものこころの診療科を併設し診療を開始しています。石川県内はもろんのこと県外からも、発達障害の疑いのある児童から成人までが、多くの病院・施設・学校などから紹介されるほか、実際に噂を聞きつけて直接来院される患者さんも増えています。

一方病棟業務としては、東二階に七床(神経科)、北病棟一階に開放病棟十八床、閉鎖病棟二十八床の計五十三床を担当しています。東二階病棟では主に、睡眠時無呼吸症候群や身体合併症を有する神経症の患者を、また北病棟では、統合失調症、気分障害、強迫性障害のみならず、認知症から児童の摂食障害まで幅広く受け入れています。平成二十年四月からは精神科身体合併症加算も取得し、身体合併症を有する精神疾患患者の受入も積極的にを行っています。平成二十年の入院経路としては、予約が五三%、時間内救急が二三%、時間外救急が二五%、ICUから九%であり、また入院患者全体の四三%が何らかの身体合併症を有していました。最近では、発達障害

の疑いのある患者さんの検査目的での入院も増えています。

(教育) 医学生教育では、まず医学類四年生に対して神経精神医学の系統講義を担当しており、例年学外からの講師も招聘し、精神医学の幅広い知識を得られる内容を心がけています。また、五年生に対するベッドサイドラーニングでは精神医学的面接や診断の実習指導を行い、六年生に対するクリニカルラークシップでは各学生の担当医がマンツーマンで日常臨床の中で指導を行っています。初期臨床研修では、精神科は必須科目ではないものの、「統合失調症」、「気分障害」、「認知症」が経験を求められる疾患としてあげられており、多くの初期研修医が当科をローテーションしています。研修医の方々には、代表的な精神疾患の診断、基本的な薬物療法の習得、精神療法について学習などの目標に加え、関連病院にも協力をあおぎ、精神科救急、司法精神医療、精神科リハビリテーションについても学べるプログラムとしております。症例検討会、脳波勉強会、行動療法カンファレンスなどは随時行い、また月に一回、神経内科および脳外科と合同で臨床神経セミナーも実施しております。最後に、脳情報病態学教室の大学院生として、松原拓郎先生が統合失調症の死後脳解析を橋本の指導の下、廣澤徹先生がオキシトシンによる脳機能調節の脳画像解析を子供のこころ発達教育センターの菊知准教授の指導の下に行っています。

(研究) (一)発達障害、(二)薬物依存と気分障害、(三)統合失調症の三つの分野についての研究が行われています。発達障害の研究では、三邊教授を中心に、子供のこころ発達研究センターの棟居教授と菊知准教授

との共同で、自閉症の早期診断と新規治療法の開発を目指した研究が行われています。具体的には、発達期の脳内神経回路の形成とその自閉症における変化を脳磁図を用いて解明しており、世界初の幼児専用脳磁計を使用した研究は、世界的にも注目を集めており結果は既に一流誌に掲載されています。また、自閉症に対する新規治療法として、オキシトシンの経鼻粘膜投与の臨床応用の研究も始まっており、臨床症状の劇的な改善が期待されると同時に、脳機能の改善についても画像研究から興味深い知見が期待されています。薬物依存と気分障害の研究は、戸田講師を中心に井口助教と小杉研究員により進められています。

研究には、薬物依存やストレスの動物モデルが用いられ、依存やうつ病に共通して関わる報酬系の側坐核に着目し、シナプス伝達を司る分子の発現や機能の変化についての研究が行われています。最近では、ストレスにより側坐核のニューロンに酸化ストレスが生じ、それによりシナプス伝達を司る様々な蛋白質の発現や分布に変化が生じることが判明し、病態理解や治療法開発の糸口になることが期待されます。統合失調症については、その最大の問題である認知機能障害のメカニズムとして大脳皮質GABA作動性介在ニューロンの変化についての研究が、橋本、Georpey研究員、松原大学院生、小西技術補佐員により行われており、介在ニューロンに特異的でその機能に重要な役割をもつ遺伝子の発現を統合失調症と対照例の死後脳組織を用いて解析しています。この研究は、ピッツパグ大学精神医学部門のDavid Lewis教授との共同研究として行われています。

(橋本 隆紀 記)

## 支部だより

### 関西支部

梅雨の晴れ間、二〇一一年六月二十六日(日)十一時より関西支部総会が京都支部主催で京都ホテルオークラにて開催された。

参加者は滋賀、奈良、大阪、兵庫、京



都の各支部と法文の関西支部の三名の方が来賓として加わってくださり、計二十六名の参加で開催された。医学部本部からは、循環器内科の山岸正和教授が、京都支部の幹事の小野、辻両先生の同級生のよしみで来てくださり、大学病院の近況と先生ご専門の循環器疾患の遺伝的要因につきご講演いただいた。質疑応答も活発に行われ有意義な講演会であった。懇親会では出席者一人ひとりの近況報告があり、中村晋先生の四校校の話を古い先生方は興味深く耳を傾けておられた。山岸先生は前大阪支部長の本田先生と懐かしそうに歓談しておられた。最後は四校寮歌と南下軍を本田先生と中村先生の音頭でみんなが肩を組みながら合唱し、来年の再会を約し会を閉じた。

(八田 一郎 記)

### 茨城支部

平成二十三年度茨城支部総会が、平成二十三年九月十日(土)水戸市の山口楼本店にて、金沢大学医学部十全同窓会理事長(金沢大学大学院脳情報分子学教授)加藤聖先生をお迎えして、和やかに開催された。はじめに、加藤理事長が東日本大震災直後に、茨城県までお見舞いにお越し頂き、十全同窓会本部より多額のお見舞金を頂いたことに関して、心からのお礼を示すとともに、頂いたお見舞金は、地元の茨城新聞社を通して、更に被害の甚大な東北地方の震災復興のために、義援金として委託したことを、諸岡が代表して報告した。

全員の自己紹介の後、加藤理事長から、金沢大学医学部十全同窓会の現状について詳しく説明があり、その後、ご自身の



研究テーマ「神経遮断に関する、神経再生のメカニズムについて」のご講演を頂いた。懇親会は、水戸の地酒を交わしながら、同窓会員の近況やご自身の健康状況などについて語り合い、和気あいあいと進み、時の経つのも忘れるほどの楽しい会であった。

今後、若手の金沢大学卒の医師をたくさん参加させることと、皆さん全員が健康で再会することを約束して散会した。

#### 出席者右から

前列…田崎喜昭(昭和三十二年卒業)、加藤聖理事長(昭和四十八年卒業)、菊池勉(昭和三十九年卒業)、加納勝利(昭和三十九年卒業)  
二列目…大谷幹伸(昭和五十三年卒業)、諸岡信裕(昭和四十八年卒業)、今高国夫(昭和四十四年卒業)  
三列目…在原善英(平成七年卒業)、仁平武(昭和五十八年卒業)、田地広明(平成二十三年卒業) (諸岡 信裕 記)

### 静岡支部

平成二十三年度の静岡支部総会は、十一月一日土曜日、快晴の秋空のもと、遠くに富士山を仰ぎ、眼下に浜松市全貌が見渡せるオークラアクトシティホテル浜松の四十五階展望フロアにおいて開催された。静岡支部には、現在百余名の会員が在籍しているが、当日は十八名が参加した。本部からは、医薬保健研究域長山本博教授のご臨席を賜り、金沢大学医学部の現状と将来展望について、医学部百五十年史の貴重な資料を基に詳細に説明して頂いた。百五十周年記念誌編集委員長じきじきのお話であり、金沢大学医学部の歴史の重みを改めてかみしめることができた。また、前日に完成したばかり





りのキンストレーキのDVDもご披露して頂き、精巧に作製された国宝級の人体模型に、皆しばし目を奪われていた。その後、出席者全員が三分間スピーチで、自己紹介と近況報告を行い、金沢大学同窓生としての誇りと連帯感を高めて一次会は終了した。二次会も大半の会員が出席し、さらなる親交を温め、一年後の再開を約束して散会となった。なお、偶然にも昭和三十八年卒業の先生方のクラス会が同じホテルであり、『ここは金沢?』と錯覚してしまう一幕もあった。当日の出席者は、写真前列左より、長林勝彦先生、蜂谷徹先生、山本博教授、松田保秀支部長、鈴木幸男先生、臼井滋先生、次いで、後列左より、松下文昭先生、池谷直樹先生、柿沢紀夫先生、岡井高幹事、鏡周治先生、金田武志先生、伊藤珠野(旧姓上野)先生、内田律子先生、土屋和弘先生、堀川征機先生、東茂樹先生、佐野勉先生、そして、石神直之先生。

(岡井 高 記)

## 埼玉支部

遅れ馳せながら二〇〇三年に発足しました若い埼玉支部は二年に一度の総会を重ねて参り、今回は本部より加藤聖十全同窓会理事長をお迎えし、二〇一一年十月二十二日に第五回埼玉支部総会を開催しました。回を追う毎に参加者が増え続け、三十名近い同窓生が集まる盛会となりました。秋の時節柄ゆえ結婚披露宴が入りそうな日を避けてわざと仏滅の日を選びましたが、大宮やさいたま新都心の会場は一年以上前より既に埋まっており、初めて浦和ロイヤルパインズホテルに同窓生が集結しました。

## (一)埼玉支部総会

総会でははじめに昭和三十六年卒業中川正明支部長の挨拶がありました。百五十号記念の座談会にも埼玉を代表して参加された社交的な人柄で、比企郡の医師会長や比企郡医師会立病院副院長、地元ロータリーの会長などを歴任されました。埼玉支部の発足・発展に尽力されて来られましたが、そろそろ若い支部長に交代を希望され、二〇一二年より不徳な筆者の瀬戸幹人を新支部長に指名されました。せめて百五十周年記念事業が無事すんでからの支部長交代を懇願しましたが、出席者全員の拍手をもって支部長交代が決定してしまいました。

加藤聖理事長の講演は、「百五十周年記念事業について」でありました。集まった寄附金額は増加を続け、秋になって五千万円を超えたそうですが、更なる上積みが望まれるそうです。金沢美術工芸大学に依頼した初代卒業生の写真を立体化した記念ミニメントの紹介や、キンストレーキ修復には巨額の千五百万円も費やしたとお話がありました。二〇一二年七月七日(土)の十全同窓会総会に引き続いて、記念式典および特別講演が行われるそうで、講師に招かれる先生方の紹介がありました。百五十周年記念事業以外にも母校の最新情報を教えていただき、例えば今の医学部入試の定数は百十二名であり、その内訳は一般入試が八十名、推薦が二十名、さらに地域枠が石川県十名に富山県二名と複雑な制度を知りました。卒業後の人生に制約がありそうな地域枠は不人気かというところ、逆に非常に優秀な学生が入る場合が多いそうです。

## (二)学術講演会

今回は埼玉医大国際医療センター核医学科教授昭和五十四年卒業松田博史先生の、「脳循環における画像診断の進歩」について病認知症などを中心とした血流・代謝・受容体という非常にアカデミックスな話がありました。

従来はうつ病などの脳機能改善には、過激な電気痙攣治療にて脳幹部の血流が一時的に増加すると解っていました。最近の反復する経頭蓋的磁気刺激(反復TMS)治療では、脳血流増加効果が一週間以上も持続するそうです。またTMSにて増加した内因性ドーパミンが、その受容体を占拠している画像も興味深く、パーキンソン病の治療にも応用されています。脳血流を測定する画像診断には、SPECTによる核医学画像が長年主流でしたが、最新の特殊なMR装置を利用したArterial Spin Labeling (ASL)による脳血流測定が可能になっています。この方法では局所の血流値にバラツキが多かったのですが、松田先生の改良技術により精度の高い検査法となりました。例えば片頭痛においては、視床下部の血流低下を認めました。また右利きの人に尻取り遊びをさせると左側の言語野の血流が反応したなどの、ASL法での臨床応用の業績が次々と発表されております。埼玉医大東洋医学科の山口智先生の研究グループは、鍼通電治療において周波数の大小によって刺激される知覚神経線維の違いから、SOL-TOOTHではAδ線維が刺激され内因性エンドルフィンが増加するらしいと認識しています。ASL法によつて鍼通電治療後も持続性の脳血流増加が確認され、松田先生は「東洋の神秘」

を画像で証明されました。

質疑応答では昭和二十九年卒業小坂信生先生からは、「うつ病で脳血流が低下する領域は、躁状態に逆転する症例ではどう変化するでしょうか?」という探究心に満ちた質問もあり、勉強会は非常に盛り上がりました。その回答は、喋りっ放し・動きっ放しの躁病ではショウシナク、検査は困難なために未だに報告がないそうです。

## (三)懇親会

今回の参加者中最年長の昭和二十九年卒業小坂信生先生に乾杯をお願いしました。小坂先生の父上は福井県立病院の初代院長で、お兄さんは富山医大外科の



山本恵一元教授、弟さんは金沢医科大学の消化器外科教授から開業医となられた医師一族です。しばしの歓談後に、今回初参加の先生方の紹介がありました。一番若い(といっても卒業後十八年目のベテランやけど)平成六年卒業鈴木智成先生は、埼玉医大国際医療センター脳腫瘍外科の教員です。昭和五十四年卒業鷺谷公子先生はさいたま市でメンタルクリニックを開業しており、弓道部OGとのこと。上尾中央総合病院循環器内科部長の昭和四十九年卒業西村昌雄先生は、土曜日は夕方まで外来があり多忙にも拘わらず、途中から乱入して頂きました。昭和四十七年卒業稲松孝思先生の東京都老人医療センターでは、PETやSPECTによる画像検査も活発にやっておられます。自宅が埼玉県朝霞市で血の濃い埼玉ラインであり、埼玉―東京の両支部に所属することになります。

上尾中央総合病院グループには内科・放射線科・麻酔科・消化器外科など大勢の十全同窓生がありますが、その最年長昭和三十五年卒業水村泰治先生に締めをお願いしました。水村先生は内科診療の傍らで、今でも腎臓関係の英文論文を執筆される学者でもあります。

#### 第五回十全同窓会埼玉支部総会参加者

加藤聖、小坂信生、水村泰治、中川正明、長基 顕、柳川 洋、窪木外造、宮前達也、川田 肇、岩永昌敏、稲松孝思、西村昌雄、菊池功次、山藤和夫、高木俊二、鷺谷公子、松田博史、浅川 晃、井上 亮、川内淳子、川勝樹夫、瀬戸幹人、高橋啓介、中山光男、大澤良郎、久慈一英、市川聡裕、鈴木智成 以上二十八名

(瀬戸 幹人 記)

## 能登支部

昨年度、これまで活動してきた「七尾・鹿島支部」を能登一円をまとめた同窓会にしてはどうかと言う話が盛り上がり、平成二十二年十月三日に「能登支部」として発足させていただきました。今年度はその第二回目の会合として、十一月二十日(日)昼に七尾市「番伊」で「能登支部」総会・講演会・懇親会を開催させていただきました。集まりました会員は皆さんお忙しいためもあって、残念ながら十二名でしたが、総会に引き続き、本部十全同窓会会計理事の松井 修教授をお招きして、講演を聞かせていただきました。総会では会計報告、次期役員を選任などが行われ、次期は昭和三十九年卒業の荒井邦夫先生になっていただくことになりました。また、幸いなことにこの一年間は物故会員なく、現在の会員数は一五一名になっております。

松井先生の講演は、前半は金沢大学医学部および附属病院の整備状況や金沢大学創基百五十周年事業のことをお話いただきました。医学部や附属病院の整備が完成すれば、医学部記念館から正門までのプロムナードが出来る予想図を見せていただきましたが、早く見たいものだと感じました。また、「キンストレーキ(人体解剖模型)」の修復の話もしていただき、修理、解体、組み付けのDVDが出来ているとお話でした。後半は放射線科・第一外科と共同で行っている胸部・腹部の大動脈瘤に対する、ステント留置の先駆的治療についてお話いただきました。石川県内でも金沢大学がこの治療の中心的拠点であり、経皮的手術の方が、



死亡率、合併症でも優れていることが報告されました。

続いて懇親会に移りましたが、松井教授を囲み、佐原吉博支部長の挨拶、桜井秀明先生の乾杯で和やかに懇親会が始まりました。松井教授が「キンストレーキ」のDVDを持参されておりましたので、これを放映しながらの懇談となりました。出席されていた先生方は、この存在は知っておられた方もありましたが、実際に講義などで見せていただいた方ではなく、このような貴重な資料が埋蔵されていたことに皆さん驚かれておりました。なお、「キンストレーキ」のDVDは創立百五十周年の時に販売されるようです。最後は次期支部長の荒井邦夫先生から締めめの挨拶をしていただき、日曜日の昼のひと時を和気藹々と、有意義に過ごさせていただきました。

(川口 光平 記)

## クラス会

### 昭三〇会の今

(昭和三十年卒業)

私も九十六人は昭和三〇年(一九五五)に卒業した。インターンのあと、主に母校、また全国各地で研修・研究を始めた。一方、同級生同志が何となく集まり、いわゆる同窓会ができた。第一回は「泉 鏡花」の生家に近い料亭であったが、約三十人が集まり、会の名称を「シウサンマルカイ」とした。以後毎年開いたが、何時からか二年に一回となり、数年後には研修をすませ、各自それぞれ、その地で根を下ろした頃から北陸三県で回り持ちとなり主に温泉地で開かれた。何回か名誉教授もお招きした。また三〇周年が最高で、五十六名参加した。

平成に入ると、体調不良、さらには死亡の同級生が増えてきた。さらに本号において、前回の富山(平成二十一年・世話人 長谷川)、今回の片山津(平成二十三年・世話人 勝木)での集合写真でもお分かりのように出席者は減少し、「今回を以って同窓会としての活動は終りにしよう。今後は個人的な声かけレベルで集まろう」ということになった。この間、約半数の逝去された学友のご冥福を祈りつつ「昭三〇会」解散のご報告としたい。

(津川 龍三 記)





平成 23.10.09 於 ホテルアローレ



平成 21.10.24 於 オークスカナルパークホテル富山

## 昭和三十三年卒業クラス会

平成二十三年十月八日、福井県在住の大島、西浦、斉木、藤田、松田の四人の担当で福井市ユアーズホテルにて開催しました。宴会担当は大島君でホテルの和風料理店「橘亭」で行われました。まず、出席の返事を出しておきながら肺瘤のため急逝された前川誠君の黙祷をして開会しました。前川君は毎回クラス会に出席しカラオケ大会では同伴の奥様方を指導しながら盛り立てて呉れました。料理は美味しくお酒は鯖江の「梵」の蔵出しで舌鼓を打ちました。二次会はホテルの特別室でホテルの従業員二人が付き切りでカラオケの用意をしていただき全員カラオケ歌い楽しみました。花形は新谷夫人の淳子さんと調子を外れそうになると助けてくれました。田崎君の付添いの娘さんが若い女性ただ一人で会に花を添えられカラオケもたくさん歌われました。一児の母親とのことで東京に住んでおり水戸からきたお父さんと上野で一諸になり新幹線で来たとのことです。老人ばかりの会に花を添えられました。翌日は西浦先生の企画で福井の観光をしました。斉木君と松田が同行しました。稀に見る秋晴れの好天で九時ホテルを出発しNHK大河ドラマ「お江」で有名になった北の庄城址公園「柴田公園」を参拝し三十分ほど見学してから予定を変更して「一乗谷朝倉氏遺跡」に向いました。ここでボランティアガイドの老齢の男性が老齢の私共に気配りしながらゆっくりと説明して歩きました。解説は判りやすく好評でした。足に自信のある人には上の方の庭園



と湯殿跡などを案内してくれました。ここで約一時間かかり次いで私の提案で佐々木小次郎が燕返しを編み出した由緒のある滝「一乗滝」を見学して十二時を過ぎました。腹ごなしにもなり昼食は西浦君の待つ高級料亭「丹巖洞」に向きました。ここは幕末の要人が蜜会したといわれる苔が広い庭に一杯に生えており由緒ある料亭で必ず松茸の土瓶むしが出る。ところどころ有名です。ここは西浦君の推薦した料亭です。参加者はみなさんが満足された様子でした。そのあと、福井藩主松平家の別邸「養浩館」に向い美しい庭園を散策し見学し邸内に入り抹茶を戴きました。そのあと三時三十分すぎ福井駅東口までバスで送って貰い散会しました。来年は金沢開催に決まりました。参加者は次の通りです。石丸、大島、小野、加子（夫人）、新谷（夫人）、杉山、田崎（娘さん）、西浦、西川、西、松田（春）、福山、宮崎（夫人）、斉木の十八名です。

(松田 春悦 記)

## 「無憂会」奈良で

(昭和三十四年卒業)

金沢駅でサンダーバードに乗車すると、すぐ後ろの席に一年後輩の友人夫妻がいます。「どこへ行くんや?」「奈良です」「ワシも奈良や、旅行か?」「クラス会です」「こちらもクラス会や、偶然やね」。かくしてJR奈良駅隣接のホテル日航奈良は金沢大学卒の老医たちで占められます。

郷里の奈良市で開業した西尾功君が幹事を引き受けてくれ、京都の加納さんと大阪の小泉君が協力して、十月二十二日(土)、関西地区では初のクラス会が実現しました。総会と宴会の会場は、創業明治二十四年の老舗料亭「菊水楼」。建物は国の有形文化財に登録され、館内の廊下はうぐいす張りです。幹事の西尾君の挨拶で始まり、二年前の卒業五十年記念総会後に逝去した三名の友の冥福を祈って黙祷を捧げた。

同窓の友の三割以上を亡くしたが、上山君の話では、「数人以上が百歳以上の長寿をまつとできる」とのこと。「会費徴収の件」、「次回開催と幹事」も決定して総会を無事終了。写真撮影で最前列の座布団席は、座ることができた人々です。最も遠い山形県酒田市から参加した真田君の乾杯発声で宴会開始となった。高齢になり、畳の上での宴会は苦手となってきた友が多いが、タクシー運転手が「一般の人は入れない高級料亭で、ウン万円もします」と言うだけあって、座ると言うハンディキャップを「掃する、質の高い会席料理に全員舌鼓を打ち、皆が満足した。支配人が「西尾先生のご指示で本日は大和の食材を多く使わせていただきました」と話すように「飛鳥の蘇」(万

葉の時代、飛鳥は日本の首都だった。七世紀末、蘇が作られた記録がある。蘇は牛乳をゆつくりと特殊な方法で煮つめたチーズの仲間、貴族が賓客を迎える宴に使ったとされる)や「宇陀金(ほう)」、「吉野葛」など奈良ならではの味を堪能した。

各自一分の全員スピーチで近況を語り、想い出話に時間を忘れるほど興じた。出欠の返事がない友には、幹事自ら電話して近況等を聞き、連絡不能は一名のみとの報告だった。欠席者の回答は、ほとんどが「体調不良」、「手術後なので」、「腰が痛いので」、長距離旅行は困難」とのこと、出席者は改めて当日電車等で奈良まで出てこられたこと、クラス会に出席できる元気を維持できていることに感謝し、次回も出席できるように静かに祈った。

二次会は「ホテル日航奈良」でカラオケルーム三室を確保して、飲み放題、食べ放題、歌い放題。ところが、隣のカラオケルームには一年後輩の昭和三十五年卒の二次会が始まっていて、彼らが「先輩、今晩は」と入ってきたり、我々が「おじゃまします」と彼らの部屋に入ったりで、三十四年卒と三十五年卒が入り乱れての歌合戦となり、この階は完全に金沢大学医学部卒業生に占拠された状態だった。野球部の後輩が「中村さんに会いたい」と思っていたので今晩お会いできて大変嬉しい。今回のクラス会に出席した甲斐があった」と言ってくれるとお世辞と分かっているも嬉しい。嬉しくなってしまう。全ての後輩が礼儀正しく我々を先輩として敬意を表してくれて三十四年卒の者は大満足でさらに楽しい一夜となった。

翌二十三日(日)は、両学年とも観光で、それぞれ奈良のお寺めぐりとなった。我々は薬師寺で医師(くすし)の総元締めとさ



れる薬師三尊にお参りし、平城宮跡をバスから観ながら、東大寺、春日大社の順に参拝し、直会をいただいて近鉄奈良駅で解散となった。後輩の皆さんは別の寺社めぐりのよう中途合流することはなかった。今回のクラス会は何か二回分のような少し得をしたような感じの会だった。

出席者…赤祖父一知、池田真康夫妻、上山武史夫妻、大家啓一、岡田良康夫妻、奥田治爾、可西右使、加納昭子、河合康守、草野亮、小泉昌久、小坂牧子、小林淳介、真田稔夫妻、新城長昭、瀬嵐貞雄、中村彰、中村武夫、南後千秋、西尾功夫夫妻、福島匡昭、安元三郎、山本芳昭、以上二十八名(五十音順)

(中村 彰 記)

## さんい云

### (昭和三十五年卒業)

今年は福井県伊与、奈良県坂上両幹事のもとに十月二十二日、ホテル日航奈良で行った。東北大地震、原発事故もあり「祈り」のテーマをきっかけ、翌日の「仏像巡り」を目的として奈良を選んだ。我々の会は今回で四十九回目となり、卒業翌々年以後毎年のごとく場所と幹事を変えながら、連綿として続けられているのも金大医学部クラス会としても珍しいのではと思う。今回は同伴組十五名、単身組十名と総勢四十名の参加を得た。中には常連組もいたが、微妙に毎年参加者が入れかわり、出る度に新鮮な気がするの不思議である。

会を始めるにあたって、本年逝去された二人の学友、日置長夫君、森田聖一君の御冥福を祈って黙祷をささげた、

次に小生の司会で、まず梅田君の庶務・会計報告を受けた。引き続き佐藤君(十全同窓会会長)より、次年度に行われる創立百五十周年記念事業についての準備状況、募金状況等について報告があった。以上で報告事項は終わり、昨年、金沢での卒後五十周年記念大会幹事 木南君の、乾杯の発声で懇親会の幕を開けた。続いて坂上幹事は謡曲「狸々」を謡って心からの歓迎の意を表した。奈良仏教文化が千三百年前から中国との交流の上に花開いたことにちなみ、チャイナカルチュア「二胡」の演奏をバックに添え、古都を思わせる風情の中で酒を酌み交わした。中には、飲むほどに意気軒高「俺はまだまだ現役だヨ」と昔の小立野界わい飲み歩きを彷彿させる豪傑もみられた。二次



会のホテルのカラオケバーでは我々の一級先輩の三十四年卒メンバーとめぐり合い、お互いに何十年ぶりの奇遇を懐かしみ、昔話に花が咲いた。

翌日は、待たせてあった大型バスで興福寺、新薬師寺を参拝した後、東吉で昼食、午後は唐招提寺、薬師寺をまわった。印象深かったのは解体修理の為、我々の生存中はもう拝観できぬものと諦めていた一三〇〇年前の遺産である薬師寺東塔が工事遅れの為、ほぼ全容が見られたことだ。なんと幸運であったことか。最後に平山郁夫画伯渾身の「大唐西域壁画」を鑑賞し、そのスケールの大きさ、荘厳



さに心打たれた。薬師寺発願の趣旨は「国土安穩、万民豊樂」を願うことであつたといわれているが、今の日本こそ、この言葉が国民の祈りであるとの思いを一層強くした。次年度は横田・塩之谷両君に幹事をお願いし、名古屋での再会を誓いあつた。

**出席者** ○天羽 ○梅田 ○榎 河田

○木南 熊谷 熊谷(愛) 斉藤

○佐藤 塩之谷 渋谷 蘇原 ○室

○筑田○中島 中山 ○布谷 野田

○畑尾 ○半田 藤井 ○横田 横浜

横山 ○坂上 ○伊与

○印が夫人同伴 (伊与 曉洋 記)

## 金沢大医学部三六同窓会

(卒後五十周年記念)

昭和三十六年卒業後五十周年の同窓会が、平成二十三年十月八日、つば甚で開催された。

観光よりも「昔の金沢がどのような移ろいを示したかを見たい」が、希望の第一位であつたので、金沢大学(特に医学部附属病院、兼六園、金沢城跡を中心に見学することにした。

計画中に、三月十一日の東日本トリプル大災害が起こり、同窓会開催の適否が問題となつた。電話が通ずるようになって、女川原発の山川至君が仙台のアパートの十階で大揺れにあつたが大丈夫だったことがわかり、他の同級生についても厳しいことは起こっていないかつたことを確認できたので、三回目立ち上げ会で、同窓会を行うことに決めた。

十月八日(土)、つば甚に集合できたのは二十六名(夫婦十一組(荒川、臼井、

小林・勉、佐原、昇塚、長基、浜中、福田、大家、吉村、力丸)と単身十五名(井田、岩本、小林・清二、斎藤、寺島、中川、中田、西野、羽岡、星野、宮浦、村居、柳川、山本、伊藤)であつた。

同級会は他の会と異なり、袴のない丸腰の会である。初参加の者もいたが、いつものように学生時代の旧交をあたためることができ、だんだんエンドレスの会になつていった。

楽しく続けてきた会ではあるが、他界者が増えていく中で、五十周年を境に今後どうするかとの話が出た。しかし今後雨以降れば傘をさして進む人生は続くはずであり、元気があるうちはやろうということ、来年は富山県が幹事と決まった。そして記念の九谷焼・上出長右エ門窯の茶碗・赤絵兎文(卯年に因み)が配られた。

宿泊は全員日航ホテルであつた。今夜しかない、二組の数名が夜の片町を見たいと出かけていった。その他の多くは十七階の夜間飛行でビールやバーボンを飲み交わして話に花を咲かせた。

十月九日(日)、ホテルから大型バスで大学附属病院の見学に出発した。新築の素晴らしい病院を山本健康科教授と白倉先生に案内してもらつた。

まず外来部門の配置を見てから、手術室・集中治療室を見学させてもらった。昔と全然違う規模の病室数・スタッフ数とモニター・治療機器の配置に驚かせられた。ペーパレスのカルテもさらに進化中であつた。十階の食堂からの卯辰山と新しい金沢大学全体の広大なキャンパスの山を眺めた後、金沢大学医学部記念館に向かった。資料館も時代に沿って磨

かれ、立派になりつつあつた。

兼六園からはボランティア「まいどきん」の解説付き案内となつた。日本一のこの公園は本当に懐かしかったが、大きな変化はないようであり、微軫灯籠と噴水を見てから、早々に金沢城公園へ移つた。思い出の一般教養時代の教室、学生食堂はどこ? 理学部への道は? を探つてみたが、昔の面影が失せて大かわりしていた。昔なかった新しい建築物(菱櫓・五十間長屋、橋爪門続櫓)、石垣、堀、い

り池の整備の工事には、歴史を大事にしようとする行政の気持ちがうかがえた。



最後のしきの迎賓館では、理学部の

赤レンガと連なつた旧県庁が、昔どおりの力強い椎の巨木二本と建物は県庁の正面の知事室位までの部分だけになつて残されていた。旧四高の理学部で物理、化学、生物の授業を受けた場所は、なんとかイメージすることができた。この建物内の裏側のフランス料理店で昼食をとつたが、この場から城方向を見ると、テニスコートは消え、広大な芝生の後にそびえる巨大な石垣の壁に圧倒された。

皆のこの日の万歩計は一万歩を超える人が多かった。談笑後、またの再会を誓つてお開きとなつた。(大家 他喜雄 記)

## 三八会

(昭和三十八年卒業)

オークラアクトシティホテル浜松で行はれた。

夫人同伴者十組 総数も三十名と昨年と同じだった。今年亡くなった木戸、寺内両君のご冥福を祈つた後、久しぶりに四人揃つた女医さんに乾杯の音頭を取つて貰つた。彼女達はそれぞれ複数の子供を育てつつ医業にも精を出したことを他の男性も皆感心してゐたからだ。デザートのあと各人の近況報告に移つた頃、突然二、三人の見慣れぬ人が入室。何と同じホテルの別の階で母校医学部同窓会静岡支部の会があり、挨拶に来たといふので一同びつくり。在学中クラブ活動が一緒だった者も何人か居り、少しスピーチもして貰つた。二次会は廊下一つへだてた街の灯りを見下ろせる部屋でワインやカクテルを傾け二時間程歓談。翌日は最近開館したといふ「スズキ歴史館」で自動車製

## 同窓生の消息

厚生労働大臣賞（産学官連  
携功労者）受賞

富山通信病院病院長

高田 正信（昭和四十八年卒業）



心臓足首血管  
硬化指数(Cardio-  
ankle vascular  
stiffness index :  
CAVI、キャヴィ)

の開発で、平成二十三年厚生労働大臣賞（産学官連携功労者）を受賞しました。東邦大学白井厚治教授とフクダ電子社長との共同受賞です。産学官功労者表彰は第九回目になりますが、平成二十年度から新たに医学向けに厚生労働大臣賞が設けられ、岸本忠

.....

三先生ら四組が受賞しています。産学共同研究での、先導的な取り組みや大きな成果を取めたものに与えられ、最近はその成功事例に与えられています。CAVIは血圧に影響を受けない

動脈硬化度を示し、血管年齢が簡単、正確に判ります。今年春に国内外で販売数が一万台を突破したことや、海外で多くの前向き多施設研究に用いられていることも高く評価されました。軽症の生活習慣病から重症の腎・心疾患などの患者において、動脈硬化の重症度を正確に判定でき、多くの施設で健康診断に取り入れています。施設間や技量には差がなく、誰にでも数分で簡単にできるのが特徴で、保険点数も付いていますので、まだ使われていない同窓の先生方にお勧めします。

平成二十三年度救急功労者厚生労働大臣表彰  
「考え方はグローバルに、行動はローカルに」

福井大学医学部 地域医療推進講座

寺澤 秀一（昭和五十一年卒業）

造工程を3D映画で見た。目の前に物が飛んでくる映像に驚いた。館内に陳列してある沢山の新旧の二輪車、四輪車を見、ホテルに戻り中華料理に舌鼓を打ち散会。その後数名は隣接の浜松市楽器博物館に行き美大芸員が解説し且つ弾いてくれた古いクラヴィコードによるバッハやモーツァルトにうつとり。この博物館は七十歳以上は無料なので大いに得した気分になった。

来年は亀田君らが幹事で山中温泉でやることに決定。

幹事 橋本勉、（石川 高嶺 記）

大学人は、全国区あるいは世界区として生きるのが高い評価を受ける道とする向きもありますが、信条として「足元（地域）が変えられない者が、全国や世界を変えられるはずがない」と思っております。その意味で、全国のはとんどの救急医が「救急は三次救急（救命型）」と言っていた時代から、「地方では救急医は一次から三次まで診るべき（ER型）」という信念をもって、ER型救急医の養成に取り組んで参りました。

福井県内にER型救急医が三十名に到達し、杉田玄白記念公立小浜病院、そして今年から市立敦賀病院にも派遣が可能となり、福井市内の済生会病院、赤十字病院への派遣が実現すれば、三十年前の夢が叶います。

私共の施設に、県外からER型救急医を目指して研修に来られる専門

研修医が増加しています。彼等が地元に戻り、そこで後進の養成をして地域を変えてくれると期待しております。救命型救急一辺倒だった国公立大学病院の半数以上が、ER型救急体制に変化しています。すし、日本救急医学会も救命型だけでなく、ER型救急の取り込みをして、急速に軌道修正を図りつつあります。

昭和五十七年に福井に戻り、一人で救急医を始めましたが、一緒に働きたいという後輩が出るまでに十一年間かかりました。今回の表彰は、十一年一人で頑張った御褒美だと思っています。

## 救急功労者総務大臣表彰受賞

遠山 一喜（昭和五十二年卒業）

廣田幸次郎（昭和五十九年卒業）

この度、厚生連高岡病院救命救急センター長廣田幸次郎が平成二十三年救急功労者総務大臣表彰を受賞いたしました。

昨年度の受賞（高岡市民病院副院長麻酔科・集中治療科遠山一喜）に引き続いての連続受賞となりました。救急功労者総務大臣表彰は、「平素から救急業務の推進に功労し、公共の福祉の増進に顕著な功績があった個人及び団体を表彰するもの」で、全国で十名あまりが受賞いたします。九月九日の救急の日には総務大臣から直接表彰を受け、皇居特別参観をしてきました。遠山は「高岡医療圏メディカルコントロール協議会の設立、救急救命士の病院実習など研修体制整備に貢献し、気管挿管講習において講師全員が麻酔科医という全国的にも先進的な取り組みを行い、救急業務の高度化に貢献した。」ことが受賞理由で、一方廣田は「救急救命士の教育・指導や、高岡医療圏メディカルコントロール体制の整備など消防と医療の連携に尽力するとともに、東日本大震災における医療支援（福島空港におけるDMAT活動等）にも貢献した。」ことが受賞理由となりました。高岡医療圏のような一地方から二年続けて表彰されることは全く希有なことで、全国的にもこの医療圏の救急医療体制が注目されている証と考えております。今後も救急医療体制の一層の充実に貢献する所存です。ご支援ご協力して頂いた皆様に心より感謝いたします。（遠山 一喜 記）



# 医学部百五十年史のための覚え書【33】

## 清国留学生・湯爾和について

寺 畑 喜 朔

かねてより、母校の十全同窓会名簿を整理中、明治末の名簿から清国留学生が脱落していることを知り、この補完調査をすすめ、その全容が明らかとなった。  
この留学生の受け入れは明治三十四年十一月十一日公布(文部省令第十五号)によるもので、清国より年次をおつて九名を許可した。卒業後、彼らは清国にかえり医学医療の道に進んだ。彼らのなかで最も業績を残したのは、湯爾和であるので彼の履歴、業績などで判明している資料を紹介する。



湯爾和 (入学時)



清国の湯爾和留学願



湯爾和 (『最新支那要人伝』1941年)

まず、湯爾和の死去記事を紹介する(日本医事新報、九四九号、昭和十五年十一月十六日)

華北政務委員教育總署督辦湯爾和博士は豫ねてより肺癆の爲め療養中であつたが八日病勢悪化し同日午後七時北京西域の自邸で逝去した。享年六十三。我が國醫學を支那に扶植せし第一人者として其足跡は頗る偉大なものがある。

氏は金澤醫大出身、温厚篤學、潔白徳望の士で、昭和四年六月東大から學位を得た。我が國にも縷々來朝近くは昨夏文化

使節として上京し、我が醫界でも、日本醫師會が主催で盛大な歡迎會を催すと共に同博士の胸像を送り、心からその勞を犒らつたのであつた。

而して氏は浙江省杭州の生れ、明治三十三年日本に留學、初めは軍人志願であつたが目的を變じて醫學を志し、明治四十年二十九歳の時留學生として金澤醫專校に入學、解剖を専攻した。夫人は富山縣の生れで、常時金澤の伯母の家で留學生湯氏と知り(原文ママ)、許されて結婚學生時代から家を持つた國際愛の勝利者である。明治四十三年金澤醫專を退出たく卒業し、同四十四年郷里杭州に帰つて浙江病院を創設、更に醫藥專門學校をも經營し、大正元年には北京に今の北京醫科大學の前身である北京醫學專門學校を創立し、其の教授に就任、組織學講座を擔任、次で初代校長となつたが、舊恩を忘れず石川教授を懇々金澤に訪ふて北京醫專校の解剖學主任教授に招聘し、又石川教授の著書人體解剖學、局所解剖學を支那語に翻譯するなど日本醫學を支那に輸入した。大正九年獨逸に留學、組織解剖學を研究、同十一年歸朝、同七年教育總長に任ぜられ同十二月解職、内務總長を経て財政總長に歴任、満州事變後張學良の意を承けて渡日、支那事變に際しては王克敏氏と協力、新政權樹立に東奔西走、臨時政府の議政委員會委員長となり教育總長を兼ねた、中央政府樹立に際し華北政務委員會誕生するや教育總署督辦となつた。

### 清水秀夫氏談

同博士と同窓にして昵懇の東京市四谷診療所長清水秀夫氏は左の如く語つた。

昨年夏來朝した時から幾分病氣氣味で、結核か、マラリヤか、癌か不明の熱發があつて心配してゐた。兎に角支那に於ける現代醫學の開拓者であり、日支の文化に貢献した業績は大きい。性質は或る一部では陰險だと云ふ人もあるが、我々は温厚篤實の好紳士と見てゐる。非常に恩義に厚い人で石川教授を迎へるためわざわざ金澤に訪ねた程であつたが、石川教授なきあとに於ても同教授の恩を忘れず同博士が常時使用したピンセットや其の他の器具は今尚ほ保管し飾つてあるとのことである。

元來支那人は孔子の数を遵奉する國民であつたが、昨今ではかへつて恩を仇で返す向が多くなつてゐる時代に、斯る徳義心の厚い人は頗る稀と云はなければならぬ。張學良のもとから東北系に走つた時など、よく狙はれなかつたものだと思うが、これも彼が學者であり特に徳望家でもあつたからだらう。

### 清国留学生一覧

|          |                |
|----------|----------------|
| 清国四十二年卒業 | 韓 清泉、厲 家福、錢 崇潤 |
| 明治四十二年卒業 | 周 威            |
| 明治四十三年   | 湯 爾和           |
| 明治四十四年   | 李 繩其           |
| 大正元年卒業   | 周 頌聲           |
| 大正二年     | 李 延擢、張 猷鄉      |

## 学生課外活動支援報告

### 西日本医科学生総合体育大会

第六十三回西日本医科学生総合体育大会は、代表主管校大阪医科大学の運営の元に、平成二十三年七月三〇日～八月十三日の十五日間に渡って開催され、無事閉幕しました。

今回の西医体は天候にも恵まれ、また、交通の利便性や、充実した宿泊施設、熱中症対策が十分に行われていたことなど、日頃の練習の成果を十分に発揮するには申し分ない環境であったと思います。東日本大震災が起こり、冬季大会が行われなかった

### 白山診療班活動報告

金沢大学医学部白山診療班では、白山室内での診療所において登山客と室室スタッフへの診療ボランティア活動を五十以上の間行ってきたております。診療活動は医師である正班員の先生方が行い、副班員である医学生は先生の補助、清掃、スケジュールや物品の管理、厨房のお手伝いなどを行っております。平成二十三年度は七月十七日から八月二十八日までの四十三日間に百十八名（男性五十八名、女性六十名）の患者さんの診療を行いました。重症例はほとんどなく活動を終えることができました。

ここ数年は入山して頂けるドクターの数が少なかったのですが、今年は昨年より人数が多く、登山客の多い土日にはドクターが必ずいる環境を作ることができました。ありがたいございました。今年は学生も気合を入れて、長期間登るように力を入

ため、総合順位（全44大学中32位）は昨年に比べ後退しました。それでも、全ての部が全力を尽くせたのではないかと思います。

このような非常に大規模な大会に出場できるということは、選手にとってこの上ない糧となります。また、日々の練習などの過程を通じて様々な面において大変貴重な経験をさせていただきました。こういった私たちの活動にご理解を示し、多大なるご支援を頂きました十全同窓会の皆様方をはじめ、OBの先生方など関係者各位にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

来年度も選手一人一人がベストを尽くし、成績向上に向けて更なる努力をして参りま

れ、自分自身も初となる年度内の三回登山をしました。後輩には九日間も登ってくれた者もありました。しかしながら、学生不在の日が九日間もあり、来年こそはすべての日程を学生が埋められるように努力してまいりたいと思っております。伝統ある金沢大学白山診療班の活動を途絶えさせることなく継続させていくために、まずは学生を集め、そして白山のすばらしさを広く知ってもらい、来年度以降も活気のある白山診療班を続けていきたいと思います。

私自身、この白山診療班という貴重な活動をさせていただき感謝するとともに、これから末永く活動を続けて参りたいと考えております。夏山診療所に来てくださいました先生方、本当にありがとうございました。また白山観光協会の方々をはじめ、ご協力いただいた関係者各位、援助やご協力いただいております十全同窓会の皆様方にもこの場をお借りしてお礼申し上げます。と思います。お世話になり本当にありがとうございます。今後ともご指導ご鞭撻の

す。また、第六十六回大会は金沢大学が代表主管校となり西医体を運営することになったております。今後ともさらなるご支援のほど、よろしく申し上げます。

#### 各部の主な成績

団体/弓道部 男子三位、女子四位、卓球部 男子七位、個人/卓球部 男子ダブルス 神田・小林組 四位、陸上部 男子二〇〇m 角三位、男子二〇〇m 角四位、男子四×一〇〇mリレー 四位、男子ハンマー投げ 青野三位、男子やり投げ 宇佐美三位、女子四〇〇m 千田四位、女子走幅跳 平川三位（第六十三回西医体評議員

四年 福田 隆文 記）

程どうかよろしくお願い申し上げます。

（五年 米澤 宏隆 記）



### 立山診療班活動報告

立山診療班は富山県の立山にて夏期限定で活動を行っています。多くの人が集まる山の名所で私たち診療班は無償で疾病や事故に対応しています。

個人的な話になりますが、私がこの報告を担当するのもこれで三回目となります。過去二回と変えて、今回は学生が見ているものを一つ取り上げて、ご紹介したいと思っています。

数年前より診療所に医師不在という状況が多くなりましたが、学生はむしろこの状況を活用しています。それは自分達だけで患者さんに接することができるという点です。全学年の学生が患者さんに接しますが、一年生から三年生は臨床医学に全く接していないので疾患について何もわかっていません。わからないとはいえず、バイタルサイン測定から医師への連絡までの作業は知識が無くてもできます。知識があれば、実際の患者さんに触れることで疾患の知識を深める診察を行えると思います。しかし、そのこと以上に学生にとって大切なのは、その患者さんのおかれている立場を理解できるかどうかです。高山病にかかった患者さん、額に少し大きな傷ができたけど何ともない患者さん、腕を骨折しているかもしれないけど歩ける患者さん、様々な患者さんがいますが、「大丈夫だから登りたい」という言葉をよく耳にします。せっかく来た立山、楽しみにしていた御来光、多くの期待を持っている患者さんたちに、「下山してください」という一言が言えるかどうか。言えたとし





て容易なことではありません。納得してもらえないことはよくあります。紙面の都合でこれ以上は語れませんが、私たち学生は立山で疾患以外の問題にもぶつかり、そして悩みます。この経験が将来どう結びつくのか、私もまだ学生なのでわかりませんが、決して無駄ではないと信じています。

最後になりましたが、OBの先生方をはじめ、活動を支援してくださいます十全同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

(立山診療班代表 医学科五年 小林 拓記)

## ACLS金沢活動報告

ACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢では、BLS・ACLSを中心とした救急蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士で勉強会を行っています。BLS (二次救命処置) である心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息に対する異物除去などの基本的な技術から、気管挿管・静脈路確保と薬剤投与・心電図判読・除細動などといった高度な治療を用いたACLS (二次救命処置) まで幅広く学んでいます。講義だけでなく、実際に治療に用いる機材を使って手技練習をするので、より臨床に近い体験ができます。

全国の多くの医学部にACLS部 (サークル) があり、それぞれの大学が開くワークショップ (WS) に参加しています。ACLS金沢も、昨年度の六月にWSを開催

## Live Aid Kanazawa 活動報告

Live Aid Kanazawaは石川県の救急救命率を向上させようと市民の方々にBLS (初期救命救急) を普及させるボランティア活動を行っています。

BLSとは、人が倒れた際の迅速な救命活動のことを言います。具体的には、傷病者の意識や呼吸を確認し、救急車を呼び、心臓マッサージを行い、AEDを使うという一連の救助活動のことです。私たちLive Aid Kanazawaは、人が倒れた時などの緊急事態にBLSをどのように行うのかということを一般の方々に講習する活動を行っています。幼稚園や小

しました。北陸・東北・関東・東海・関西と、全国から総勢約九十名の仲間が集まってくれました。当日はシナリオに沿ってチームでの治療のシミュレーションを行います。全国からの声に応え、本年度も一月に開催を予定、現在準備をすすめている最中です。

昨年、蘇生の新しいガイドラインが公開されました。それにより新たなエビデンスが示され、薬剤の適応や傷病者の評価など、さまざまな変化がありました。中でも「(蘇生法の) 教育と普及」というテーマは学生ACLSにおいてとりわけ大きな問題となつていきます。技術・知識だけでなく、連帯感や達成感をも与えるインストラクションの手法について、全国の学生と日夜熱く議論をしています。横浜で行われた、第五回日本学生ALS大会にも参加し、学生WSの在り方について話し合いました。「学生同士が教

学校、専門学校や公民館など、様々な場所でもBLSについての講習会を開いています。それぞれの場所のニーズや季節に合わせて講習内容を変えることもあり、非常に喜んでいただけていると思います。

最近では以前に私たちの講習会を受けたことのある方も多く、心臓マッサージやAEDの使い方によく慣れている方もみられ、とてもうれしく思っております。また、先々代の代表の時に講習を受けていらつしやった方で、我々が知らないことを逆に教えてくださる方にも出会うこともあり、私たちの活動が広がっていることを実感しています。

その他の活動としては、医学部学生向けにアメリカ心臓学会のBLSプロバイ



えあう」という環境をいかにうまく使えるかが今後の課題です。試行錯誤しつつ、理想の形を追求していきます。そしてこの活動を通して、「蘇生の輪」がより広がっていくことを信じています。

最後になりましたが、私たちの活動を支えてくださる救急部や麻酔科蘇生科、そして十全同窓会の先生方に感謝申し上げます。

(四年 田口 理恵 記)



## 医学展開催御礼

医学展も終わり冬の足音が聞こえる今日この頃ですが、十全同窓会会員の諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

十一月五、六日に開催されました二〇一一年度医学展は、連日の悪天候に見舞われたにも関わらず、四千人近い来場者を迎えて盛況のうちに無事閉幕することができました。十全同窓会の皆様方には、二〇一一年度医学展開催に向けてご支援、ご協力を賜り、医学展実行委員会一同深く御礼申し上げます。

今年度の医学展はテーマを設けてありません。来場者の方が楽しめるものになりたいと考え、各々の企画に込められた思いを一つにまとめる言葉が見つかり



ませんでした。あえてテーマを掲げるとしたら、それは「今できることを考える」であつたと思います。二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起こりました。そんな中で私たちが社会に対してできることは何だろうか？ そういった、我々に出来ることを考え、試行錯誤しながら今年の医学展を作り上げました。

今年の企画では、去年からの「模擬病院」に「耳鼻科」、「整形外科」、「放射線科」、「眼科」、「精神科」、「皮膚科」、「看護」ブースを増設し、医療をより身近に感じていただけるよう、診察器具を使つて実際の検査を体験できるようにしました。また、東日本大震災特別企画を設け、救急部として現地へ向われた先生の講演会や、核医学の先生による放射線についての講演会、災害ブースなど、今、知っていただきたいこと」を盛り込みま

ダーやACLSプロバイダーの講習会を行つており、多くの学生に参加してもらっています。

昨年は東日本大震災が起こり、みなさんの防災意識や死生観も変わったことだと思います。我々の活動が、何らかの形でその助けになればと思っております。

依頼があればどこでも講習会を行います

.....

毎年、ご好評をいただいている医学展ですが、ご家族で来場される地域の方々が大勢いらつしやいます。しかし、学生を中心とした若い世代の興味をなかなか引けないのが現状です。昨今若いころからの健診や予防の重要性が叫ばれている中で、医学展をきっかけに若い世代に少しでも医療に興味を持ってもらいたいと思ひました。そのため、今年は屋外ステージに芸能人や有名なアカペラが



す。興味のある方はホームページがありますのでそちらの方をご覧になってみてください。

最後に私たちの活動を支援してくださる救急部の先生方、そして十全同窓会の先生方に感謝申し上げます。

(五年 林 洸太郎 記)

.....  
ループを招くなどしてステージを充実させました。その甲斐あつてか、ステージ前は悪天候にもかかわらず若い世代を中心に大盛況となりました。ステージを見に来ていただいた方の何人が他の企画を見て下さったか分かりませんが、医療に接するきっかけになったのではないかと信じています。

今年で復活から五回目となる医学展ですが、組織や資金繰りなどの様々な面において改善すべき点が沢山あります。特に今年はステージに初めてゲストを呼んだため、例年よりも金銭的に無理をしたところもあつたと思います。しかし、この試みがこれからの医学展を更なる活気のあるものにするきっかけになるだろうと信じております。ご支援下さった皆様には改めて感謝の意を表したいと思ひます。

医学展はこの先どのように方向へ向かうかはわかりません。しかし、私たちが行ったことが次につながるよう支援していく所存でございます。同窓会の皆様には、医学展の更なる発展のためとご理解いただき、ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

二〇一一年度医学展実行委員長

竹下 諒 記



## 十全昔話

## 我が青春

九谷 修 (昭和二十五年卒業)

私は、昭和十九年三月二十二日、太平洋戦争の真最中に、海軍兵学校を卒業して海軍士官となった。私達のクラスは艦船部隊、航空部隊に分かれてそれぞれの任務につき、私は艦船組で、少尉・中尉と昇進し、戦争が終わる迄の一年五ヶ月の間に、クラス約三分の一が戦場で散っていった。花も蕾の弱冠二十歳から二十二歳というところであった。彼等ひとりひとりの真剣な顔、笑った顔などが、それから六十数年たった今でさえ、昨日今日のこのように鮮やかに浮かんでくる。日本海軍の命運を決めたマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦に参加したので、体験の一部を残したいと思う。

昭和十九年四月呉軍港より戦艦「大和」に便乗し、海路シンガポールの南、リンガ泊地に到着、戦艦「榛名」乗組になり、機銃群指揮官として猛烈極まる訓練に励んだ。

リンガ泊地は、シンガポールから南へ約一三〇カイリ、スマトラの東岸にあり、外周は大小の島々で囲まれ、南北約五〇マイル、東西約三〇マイルで、海底は平坦、どこでも投錨が可能である。最も有利な条件はパレンバンという無尽蔵の油田地帯が近くに控えているので、燃料のために頭を使う必要もなく、思う存分訓練ができるということである。

小澤治三郎中将の率いる第一機動部隊で、「大鳳」「瑞鶴」「翔鶴」の正式空母、「大和」「武蔵」を含む五隻の戦艦、六隻の軽空母など総勢五十五隻の艦艇で構成

されていた。

米軍が六月十五日サイパン島に上陸、直ちに「あ号」作戦が発動され、サイパン島西方海域で十九二十日の両日、日米両軍がミッドウェイ海戦以来二年ぶりに激突した。小澤長官が必勝を期し、全日本海軍が深く期待した航空機によるアウトレインジの作戦はミッチャー提督の率いる米五十八機動部隊によつて鎧袖一脱、もろくも潰れたのであった。再起を期し、再び石油の豊富なリンガ泊地に赴き、昼夜を分かたぬ猛訓練が始まり、艦隊の練度も極めて向上した。

米軍は十月二十日、レイテ島に上陸を開始した。直ちに豊田副武連合艦隊長官より、捷一号作戦発動、尚第一遊撃部隊(栗田本隊)は二十一日早朝、豊田長官より二十五日黎明、タクロバンに突入し、敵の攻略部隊をせん滅すべき命令を受領した。

海軍はこの作戦を最後の戦と覚悟し、水上艦艇も航空母艦も潜水艦も基地航空部隊も、ありとあらゆる総兵力を動員した。アメリカ海軍もまた、全兵力をこれに集注してここを先途と戦った。戦場は南北千数百カイリ、東西一千カイリにわたり、四昼夜におよんで、潜水艦戦あり、航空戦あり、追撃戦あり、戦闘は連続行われ惨烈をきわめた。

さらに本作戦は、海上戦闘の定石たる両軍主力の洋上決戦にあらずして、局地に泊の敵輸送船団撃砕を目的とした大艦隊の特攻作戦であったため、いっそう作戦の内容は複雑煩瑣なものになったのである。かくて戦場の常として、敵にも味方にも色々の錯誤、誤観測、誤判断等が入り乱れての戦闘であった。

十月二十二日、リンガよりブルネイに進

出していた栗田艦隊は西村部隊と分かれてレイテ湾に向け出撃した。

栗田艦隊は翌二十三日、パラワン水道において敵潜水艦の襲撃を受け、旗艦「愛宕」沈没、「高雄」航行不能となった。またもや敵潜の魚雷四本が「摩耶」に命中し、同艦は数分に於て爆沈した。旗艦を戦艦「大和」に移して作戦を継続した。

二十四日未明にはミンドロ島の南方を迂回して〇六三〇以後二十六ノット即時待機としてシブヤン海に進出した。

この日天候晴、海上は油を流したように静穏であった。

一〇〇〇頃から電探は確実に敵を捕捉し、しきりに東方より敵機大編隊の近接を報じ、一〇二五には約三〇機の母艦機の一群を発見、まもなく敵機は攻撃に転じ、肉薄殺到してきた。輪形陣の全砲火は二斉に大蓋を切り、たちまち修羅場と化した。大小の各種砲より打ち出す無数の砲弾は空中高く炸裂して一面に黒点を印し、数千挺の機銃は間断なく発射されて、弾丸雨霰のごとく、殷々轟々耳も聾せんばかりである。敵機動部隊より終日のべ約三〇〇機、五次にわたる猛烈きわまる航空攻撃を受けた。

戦艦「武蔵」を攻撃した敵艦上機の数は延一五〇機以上で、これによつて魚雷二〇本以上、爆弾一七個以上命中し、至近弾二〇個以上を受け、最後の空襲終了後四時間四五分を経過してから沈没した。

二十五日〇三〇、無事サンベルナルジノ海峡を通過、夜間索敵配備をつくり、速力二〇ノットで〇三〇〇まで東進、敵を捜索、それより南東に変針、レイテ湾突入を期しつつ、サマール島に沿つて南下した。

二十五日、日出〇六二七、風向東北東、風力五〜八メートル、海上やや白浪あり、

〇六四五突如、南東方はるか水平線に数本のマストを発見した。この時の旗艦「大和」の位置、スルアン灯台の三五七度六〇カイリであった。マストに引きつづいて飛行甲板が見えてきた。飛行機が連続着艦している。

「大和」はただちに増速、敵方に向首し、敵空母に対し距離三ニキロ、前部砲塔(二八インチ砲)で射撃開始し、つづいて第三戦隊もまた敵空母に対し砲戦に加入した。間もなく栗田長官は第五、第七巡洋艦戦隊に突撃を令した。敵は始め東ついで南、つづいて南西と次第に内圏を描いて退却、その間煤煙幕やスクロールを利用して韜晦に努め、また間断なく飛行機の雷爆、巡洋艦等の魚雷攻撃を行ない、わが方の追撃を阻止妨害した。これに対し、わが方は、第五、第七戦隊の重巡を先頭に、「金剛」「榛名」の高速戦艦これにつき、第一戦隊の「大和」「長門」これにつづき、各隊各艦猛進また猛進につづ追撃をもつてすること二時間におよんだが、主としてスクロールと保有燃料の関係でこれを断念、レイテ湾に向かった。北方約一〇〇カイリに敵機動部隊出現の報告を得たので、レイテ湾突入を断念して、これと決戦せんと北上した。敵機動部隊との遭遇接觸はついに起こらず、同夜再サンベルナルジノ海峡を通過して帰途についた。西村部隊は、レイテ湾に突入奮戦したが、駆逐艦一隻のほか全滅し、戦艦二隻、重巡一隻、駆逐艦三隻を失った。栗田艦隊の追撃戦中止後、神風特攻隊が初の攻撃に奏功し、敵空母一隻を沈めた。最終目的としたレイテ湾突入も、敵機動部隊との決戦も、いずれも生起しなかった。そしてわが連合艦隊は名実ともに全面的に崩壊し、再び起こすことは出来なかった。

## 学生コーナー

## 四年生の今考えること

医学類四年 赤路佑希子

あつという間に学生生活が過ぎてゆき、もう四年生の後半へとさしかかって、いろいろ勉学や将来のことについて考えることが多くなりました。今回の寄稿で、少しでも私が最近の思うことなどを書かせていただきたいと思います。

今の時期、金沢大学医学部四年生は本当に忙しい時期であり、毎日が勉強です。系統講義の試験が多いうえに、CBTや、実技試験のオスキーなども重なり、臨床にかかわる勉強をする機会が多くなりました。集中的に勉強をする分、何度も試験に出てくる重要な疾患など効率よく勉強できるという利点もあるのですが、やはり試験が重なりとそれなりにしんどいものです。しかしながら、三年生までの基礎の講義とは異なり、実際の医師としての仕事をより身近に感じられる四年生の勉強は楽しいと感じることも多いです。今まで大学のシステムに流されるままに受けてきた授業、実習、実験などの勉強内容がいかにされ、疾患について深い理解が出来たときは嬉しいものです。また、試験を課されないとなかなか勉強しないという性分もあるので、試験を課して鍛えていただけなのはありがたいことだなあ、としみじみ思うことも多いです。試験もさることながら、四年生ではグループ実習も多く、普段はあまり関わらない同級生と接する機会が多くなりました。友達としてではなく、勉学を共に進めていく関係として話し合い、理解を

深めていく作業は新鮮で、非常に刺激になります。自分の理解を越えた内容をすらすらと発表し、意見を提示してゆく同級生の姿を見てると意識が高まり、自分ももっと勉強をしなければ！という気持ちになります。臨床においても医師、看護師、検査技師などのそれぞれの分野でのエキスパートとの連携した作業が重要となってきました。そういった意味でも、四年生の勉強は臨床を意識した授業が多く、勉強になります。

さて、そうした授業を受けている中で、将来の自分の医師像について考える事が多くなりました。専門をもちたいのか、総合的に診療できる医師になりたいのか、はたまた研究医になりたいのか……。医師と一言にいつても、方向性は様々です。私の場合は女性ということもあり、家庭を持つ場合によっても将来は変わるかもしれません。学生時代は六年間という長い間、両親に学費を払ってもらい、なおかつ税金を消費しながら勉強させていただいています。そう思うと、精一杯社会に貢献できる医師にならなくては、というプレッシャーも感じますし、将来を考えると今は期待半分、不安半分といったところです。

不安といえば、一年生から三年生にかけての時期より、医師になることへの不安が大きくなった気がします。やはり四年生になると実際の臨床現場で働いていらつしやる先生方が講義されるので、患者さんのお話を聞くことが多くなります。そうすると、改めて医師という仕事がか人の人生に深くかわる大変責任の重い仕事である、ということに認識します。自分はその責任に応えられるだけの

知識、経験を積み重ねていかなければいけない……。そう考えると、医師になるという現実から逃げたくなる時もあります。しかし、それだけの責任を負う分、勉強して得た知識、経験がいい方向に影響し、患者さんを自分の力で助けられるという素晴らしいことも可能です。そう思うとやっぱり医学類に入ってよかった、と思います。

ちよつと話がとんでしまいましたが、私が今考える将来の医師像の話に戻りたいと思います。実はまだはつきりとした医師像はなく、どの科に行きたいかという希望も特にないのですが、少なくとも臨床に携わりたいと思っています。直接患者さんに接して、お話をして、心身ともに癒していける存在になりたい。「癒し」という言葉が私の中で、将来の医師像を考える上で重要なキーワードになっています。実力はもちろん必要なのですが、それに加え、患者さんを安心させて、癒してあげられる医師になりたい、と昔から思っていました。まだまだ未熟な思考や行動しかできない私ですが、そんな医師になれたら、と想像する時、勉強も頑張ろう、という気持ちになれるので試験などでつらいときはそう考えることにしています。

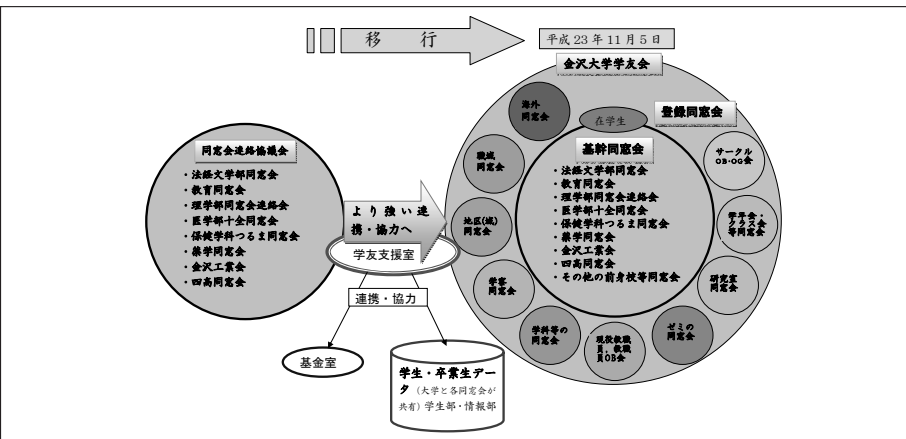
他には専門医になるより、総合的に診療できる医師になりたいと思うことも多いです。近年は生活習慣病などが多く、多彩な病気を持つ患者さんが多いので専門に特化するよりも全体を見ることのできる医師が重要になってくるのでは、と思うからです。患者さんに身近な家庭医もいいな、と思うこともあります。家庭医が増えれば、身近に患者さんと日頃か

ら接することで疾患の予防などにつながり、医療費削減などに貢献できるかもしれません。その他には大学病院よりは開業するのでもいいのでは、という自分の将来像を膨らませて想像しては楽しんで……。ということの繰り返しです。が、実際働いてみないと分からないことも多いと思うので妄想だけでいつも終わるので……。す。

医師になることへの期待は大きいですが、四年生になって、その気持ちはより一層高まりました。将来自分は患者さんを治す立場に立てるのだ、という実感が臨床に関した授業を受けることでわいてきて、意欲が高まります。あと、グループ実習の話のときにも少しふれたのですが、同級生のレベルの高さも意欲向上に大きく影響しています。みんなやつぱり根は真面目で、やるときはやる人たちがかりです。その集中力、意欲には本当に感心させられることが多く、そういった仲間たちと同じ学年になれたことは本当にうれしいことです。そういったことを考えていると、最近金沢大学で医学を勉強することが出来ることに本当に感謝するようになりました。これからも精一杯私なりに自分の理想とする医師像に近い医師になれるよう勉学に励んでいきたいと思っています。







昨年十一月五日、角間キャンパスで第五回金沢大学ホームカミングデイが開催され、卒業生百八十名（家族等を含む）、教職員・学生三十名、計二百十名

深山  
彬氏

を見学後、主会場の自然科学大講義棟に向かった人も多く、十三時の金沢大学友会設立総会開始時には、会場はほぼ満席となりました。

『第一部』の金沢大学学友会設立総会では、はじめに学友会設立準備組織である同窓会を連絡協議会幹事会を代表して同窓会担当の古川仞理事 副学長（十全同窓会副会長）が、開会の挨拶を兼ねて、学友会設立に至るまでの大学と同窓会との協議等の経緯についてスライドも使つて詳細に述べ、「大学と同窓会」との信頼関係積み上げの努力の結果として今日の学友会があり、それはトップである中村学長の確固たる決意が土台にあります。今後も、連絡協議会設立総会で確認された『卒業生は大学の重要な構成員』という初心を忘れることなく、本学は同窓会活動への支援を続けていく」ことを強調して報告を結びました。

次いで事務局から、学友会会則、役員の構成、学友会への登録状況等について報告が行われた後、初代学友会会長に金沢商工会議所会頭深山彬（みやま・あきら）氏（昭和三十八年法文学部卒業）が選出され、出席した副会長、代表理事、理事及び監事も順次紹介されました。最後に、同窓会連絡協

議会の竹田亮祐会長（十全同窓会顧問）から「大学とは何か」が改めて問われている昨今、学友会の重要性について触れた上で、同窓会と連絡協議会の役割が発展的に終了した旨の挨拶があり、閉会しました。

「第二部」の第五回金沢大学ホームカミングデー歓迎式典の挨拶で中村信一学長は、東日本大震災における学生ボランティアや教員の貢献を含めたこの一年間の金沢大学の教育研究活動の推進状況や今年新たに設置した石碑「金沢大学発祥の地」について報告し、併せて、一億円を超えた金沢大学基金への卒業生の大きな協力に謝辞を述べました。

続いて、同窓会を代表して就任直後の深山学友会会長から「母校の強力な応援団として一回り大きくなった学友会へ一層強い『結集』を訴える挨拶があり、来賓五名、基幹同窓会の代表八名及び登録同窓会の代表

十三名、学長  
ほか出席の大  
学役員、部局  
長等も順次紹  
介されました。  
学生への学長



歓迎の挨拶を述べる  
中村信一学長

表彰、金沢大学基金への高額寄附者の芳名と出席者の紹介の後、本学大学院医学



記念講演する  
三邊義雄教授

系研究科の三  
邊義雄教授（昭  
和五十三年医  
学部卒業）が  
「子どものこ  
ろ・二十一世紀  
の新しい精神



閉会の挨拶を述べる  
古川侃理事・副学長



## 閉会の挨拶を述べる 古川侃理事・副学長



記念講演する  
三邊義雄教授



## 歓迎の挨拶を述べる 中村信一学長

医学」と題して記念講演しました。本年のNHK新人芸能大賞受賞の桂まん我さん（平成六年工学部卒業）による「下方落語独演会」を最後にプログラムは終了し、来年の再会を期して散会しました。



歓迎式典のはじめに出席者全員で金沢大学校歌を斉唱

会場を金沢城公園五十間長屋に移して開かれた「第三部」の学友会設立記念パーティには百五名が出席。本学学生サークル琴尺八部の「六段の調べ」の演奏で幕を開けた記念パーティは、金大生協から提供された創基百五十年記念オリジナルワイン（GRATITUDE）より、同窓会連絡協議会を牽引した竹田亮祐氏の発声で乾杯し、懇談に入りました。途中、職域、地域の代表が次々と挨拶に立ち、学友会と大学への結果の決意を表明。北の都会月例会世話人の有志は、法経文学部同窓会の本部・支部、金沢工業会東京支部、葉学関東同窓会等が作成した金沢大学懸垂旗（縦：二百八十cm×幅九十cm）と目録を深山会長に手交し、同世話人有志の先導で、出席者全員で校歌と四高寮歌「北の都」「南下軍」を高唱し、最後に岡田晃元学長が「三本締めで会を締め、終了しました」。

（学友支援室長 西谷 公作 記）

## 「荊棘の門」銘板の 設置と薔薇の植樹

ケヤキのペープメントに面し、医学類F棟西側に立つ学生専用門の鉄製アーチは、「荊棘の門」とよばれる。昭和二十七年卒業生が卒業記念に設置したもので、「荊棘の道を歩め」との井上剛医学部長（当時）の教えに由来する。この学年は卓越した医学者・医家を数多輩出した。平成二十三年十月十九日、この学年から後進たちへのメッセージを伝える銘板が医薬保健研究域によって設置された。銘板には「荊棘の経を拓きscientia/arsの修得に勉めよ 而立会一九五二」と刻されている（写真1）。平成二十三年十一月十八日、而立会を代表して、竹田亮祐先生と助昭三先生による薔薇の植樹が行われた（写真2）。品種はポールズ・ヒマラヤン・ムスク。開花は本年五月末〜六月前半の見込み。私たちの母校の創立百五十周年は、荊棘の門を飾るソフ



写真1



写真2

トピンクの花々によっても祝されるであろう。  
（編集委員 山本 博 記）

## 「ヒポクラテスの木」 石碑の設置

平成二十三年十月十九日、「ヒポクラテスの木」の石碑が医薬保健研究域によって設置された（写真）。「ヒポクラテスの木」の元は、ギリシャ・コス島で医聖ヒポクラテスとその下で弟子たちを教えたといわれるスズカケノキ（*Platanus orientalis* L.）。ギリ

リシヤ国政府から昭和五十二年に日本赤十字社に贈られた「ヒポクラテスの木」の苗木に由来する若木二本が、平成十五年三月四日、昭和二十九年卒業の正橋剛二先生から本学に寄贈された（会報百二十五号参照）。「ヒポクラテスの木」の若木は当初医学部中庭に植えられたが、改修工事に伴って正門に近い現在の緑



地に移され、うち一本が活着した。「ヒポクラテスの木」の石碑には、木の由来とともに「生命はみじかい」ではじまるヒポクラテスAphorisms冒頭の言葉が刻されている。訳は、西洋医学の定着の象徴として「ヒポクラテスの木」の日本での根つきに情熱をかけた故緒方富雄東京大学名誉教授による。「ヒポクラテスの木」と石碑が、このキャンパスで学ぶ若い人たちの医学への志の涵養に資するところとなれば幸いである。  
（編集委員 山本 博 記）

## 金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員のご紹介

学内編集委員は中村信一、加藤聖山本健（編集委員長）、山本博、山岸正和、太田哲生、大島徹、中村裕之、和田隆志、佐々木素子、若山友彦、鈴木潮人、中西清香の十三名。学外編集委員は寺畑喜朔、山口成良、柿下正雄、津川龍三、興村哲郎、多留淳文、赤祖父一知、佐藤保、三輪晃一、橋本琢磨、勝田省吾、大村健二、横山仁、横山修、常山幸一の十五名。以上三十八名で構成されています。

本年もよろしくお願い申し上げます。

## 編集後記

あけましておめでとうございます。本年は金沢大学医学部創立百五十周年を迎えます。さらに、十全同窓会報は本号で百五十号となります。会報は年に複数回発行されますので、今後、会報の号数は創立年数よりも大きくなっていくことになり、創立年数と会報の号数が切りよく一致するのは今回のみとなります。このような記念すべき本号の内容は、先輩方、現役医師、学生を含む、様々な立場の会員の皆様に、特に興味を持っていただけたらと思います。

まず、金沢大学発祥の地である彦三種痘所の跡地が推定され、同地の彦三郵便局前に石碑が建立されました。会員のみなさん、地域住民、観光客の目に触れることも多いため、広く金沢大学の歴史を知っていただく良い機会になると思われます。また、金沢医学館跡地には、金沢大学医学部創立百五十周年記念事業により石碑が建立されました。同事業については、井関尚推進委員長のご報告を、記念誌の詳細については、山本博先生の論説をご覧ください。現役医師、教官の活躍として、多数の先生方の受賞が紹介されていますが、特に大型プロジェクトである「最先端・次世代研究開発支援プログラム」に本学医学系から三名の先生方の研究課題が採択されました。先生方の益々のご活躍をお祈りいたします。

学生は授業、実習等で忙しい日々を送っていますが、昨秋には医学展が開催されました。来場された地域の方々にとって、患者以外の立場で医学に接することが出来る良い機会であったと思います。

本同窓会報では、今後も、会員の活躍や本学の現状をお伝えしていきます。会員の皆様のご意見をお待ちしています。

（鈴木 潮人 記）